

市民ミュージアム
大野城心のふるさと館

紀要

第1号

2021



大野城心のふるさと館
Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum

刊行にあたって

この度、『市民ミュージアム 大野城心のふるさと館紀要第1号』を刊行する運びとなりました。当館は、「歴史」・「こども」・「にぎわい」をキーワードに、多様な利用目的で世代を超えた交流を深める大野市の施設として平成30（2018）年7月に開館し、今年で3年目を迎えました。

さて、当館の博物館活動を果樹に喻えますと、展覧会や各種講座、体験学習等の活動をおいしい果実として多くの市民に楽しんでもらうことが使命だと考えます。おいしい果実をたわわに実らせるためには、元気な樹木を育てる必要があります。樹木の根は大野城市域の歴史・民俗等に関する資料の収集・保存ですし、幹や枝は調査研究活動にあたります。これら活動の記録や研究の成果を紀要として発表いたします。

ところで、当館は、本市の名称の由来となった特別史跡大野城跡とゆかりの深い韓国公州市にあります国立公州大学校博物館と学術交流協定を締結しています。このことから、本号には百済考古学を専門とする館長徐程錫（ソ・ジョンソク）教授による大野城跡を含めた古代山城に関する論考を掲載させていただきました。本市の歴史の解明や当館の充実のために館外の研究者の御寄稿も欠かせないと考えています。今後は形にとらわれない紀要のスタイルも試行したいと考えています。ぜひ忌憚のない御意見や御感想を頂ければ幸いです。

本書が多くの方に活用され、更には市民の皆様のふるさとを考えるきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、調査研究にご協力下さいました関係各位をはじめ、日頃より当館の運営にご支援を頂いている皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

令和3（2021）年10月

市民ミュージアム 大野城心のふるさと館

館長 赤司 善彦

目 次

西日本「朝鮮式山城」の築城記録と百済山城 ソ・ジョンソク	1
서일본 '조선식산성'의 축성 기록과 백제산성 서정석*	15
蓮華文を有する陶板について～塚原遺跡群出土未報告資料の紹介～ 上田 龍児	25
西海道における軒丸瓦一本づくり 主税 和賀子	31
下大利の御大師様～御笠郡の数珠繰り行事について～ 山村 智子	41

百濟学報第31号所収

西日本「朝鮮式山城」の築城記録と 百濟山城

ソ・ジョンソク

(目次)

- 1.はじめに
- 2.「朝鮮式山城」の文献記録
- 3.「朝鮮式山城」と防御戦術
- 4.結び

国文抄録

西日本には百濟滅亡後、日本に渡った百濟の遺民によって築造された山城がある。それを「朝鮮式山城」と呼ぶ。このような朝鮮式山城は百濟の遺民によって築造されただけに、百濟の山城と密接な関係があるものと考えられる。ただし、百濟山城との関連性については、まだほとんど明らかになっていないのが現状である。したがって、ここでは「朝鮮式山城」の築城記録を中心に百濟山城との関連性を探ってみよう。

「朝鮮式山城」の築城記録を見ると、最初に水城を築造し、統いて長門国城、大野城、基跡城が順に築造されている。このような事実から見て、当初は水城を築造し、博多湾から大宰府への道を遮断しようとしたことがわかる。これが第一の防御網である。統いて長門国城を築造して関門海峡を統制しようとした。これが第二の防御網である。その次には、対馬から四国を経て河内に至る所々に山城が配置された。これが第三の防御網である。

このように、当時の西日本には水も湖らしき防衛網が構築されていたが、これは百濟が構築した防衛体系と非常に類似しており、百濟遺民の指揮

の下で山城が築かれたという歴史的事実を裏付けている。

キーワード：朝鮮式山城、水城、長門国城、
清野作戦

1.はじめに

西日本に百濟の遺民によって築造された古代山城があることはすでに広く知られている¹⁾。このような山城は、一時、朝鮮式山城と神龍石式山城に分けて捉えることもあった。そのため神龍石式山城の性格をめぐって100年にわたる熾烈な「神龍石論争」が繰り広げられたのである²⁾。

1963年から始まった「おつば山神龍石」の発掘をきっかけに、それまで「神龍石」と呼ばれていた遺跡が、実は防御用の山城であることが明らかになり³⁾、神龍石は「神龍石式山城」と呼ばれるようになり⁴⁾、今では「朝鮮式山城」と「神龍石式山城」の区別なく「古代山城」と呼ばれている⁵⁾。

朝鮮式山城はもちろん、神龍石式山城もまた山城であることが明らかである以上、単純に文献記録にその名称や築城記事が見られるという理由だけで朝鮮式山城と呼び、そのような名称や築城記録が見えないという理由だけで神龍石式山城と呼び、両者を区別視することは問題と言わざるを得ない。ただし、神龍石式山城については、まだ築城時期や築城目的が明らかにされていない以上、その性格や築城時期が明らかになるまでは、両者を相互に区別視するのも全く無意味なことではないと考えられる。今回、朝鮮式山城だけを抜き出して言及するのもそのためである。

周知のように、朝鮮式山城は663年に行われた白村江の戦いの後、日本に亡命した百濟貴族の指

- 1) 차용경, 2005, 「백제지역의 고대산성」(백제문화재연구원 역사문고 18), 주류성, 365~378等.
차용경, 2007, 「제5절 일본에 있는 백제계산성들」『百濟의 建築과 上木』(백제문화사대재연구총서 15), 중남역사문화연구원, 182~191等.
- 2) 小田富士雄, 1983, 「北九州瀬戸内の古代山城」, 名著出版, 16~22等.
- 3) 銚山益外, 1965, 「おつば山神龍石」, 佐賀県 武雄市:小田富士雄 編, 1983, 「北九州瀬戸内の古代山城」, 名著出版, 122~181等. 神龍石は 神龍石式山城으로 부르게 되었고, ①)
- 4) 黄泰忠, 1968, 「日本古代遺跡の研究」, 吉川弘文館, 168等. 이제는 朝鮮式山城과 神龍石式山城을 구별하지 않고
다 같이 고대산성으로 부르고 있다. 5)
- 5) 小野忠熙, 1983, 「古城山神龍石」「北九州瀬戸内の古代山城」, 名著出版, 212~213等.
向井一雄, 2017, 「よみがえる古代山城」, 吉川弘文館, 8等.

揮の下、西日本に築城された山城をいう。そのような山城を「朝鮮式山城」と呼ぶ理由もそこにある。言い換れば、韓国スタイルの山城という意味である。

このように百済貴族の指揮の下で誕生しただけに、朝鮮式山城が百済山城と密接な関係があるということは容易に推測できる⁶⁾。しかし、いまだに両者の関連性はそれほど明らかになっていない。両者を直接比較できる十分な発掘調査が行われなかつたからである。したがって、ここでは朝鮮式山城の築城に関する文献記録を検討し、それに基づいて百済の山城と西日本の朝鮮式山城との関連性を探ってみよう。

2. 「朝鮮式山城」の文献記録

先に説明したように、西日本の古代山城は一般的に朝鮮式山城と神籠石式山城に分けていることが一般的である。ここでいう朝鮮式山城とは、『日本書紀』や『続日本紀』のような文献記録に城郭名称や築城記事、または修築の記事が登場する城郭のこと、山城構造は存在するがその名称や築城記事などが文献記録にない城郭を「神籠石式山城」という。文献記録に登場するか否かが基準となるわけである。

日本にはこのように数少ないものの築城記事を有する山城があり、築城時期がはつきりとわかる山城が存在する。しかしながら、ゆかりの地となる百済には山城は多いものの、築城時期を知ることができる山城はほとんどない。したがって、

今後、百済山城や朝鮮式山城を研究するためには、互いに不足している部分を補完する必要があると考える。そのような点から、まず朝鮮式山城に関する文献記録を見る必要がありそうである。

- A-① この年、対馬、壱岐、筑紫国などに防人を置いて烽火を設ける。また、筑紫に大きな堤を築いて水を貯めた。名づけて「水城」という⁷⁾。
- ② 8月に達率答体春初を長門国に送って築城させた。達率億礼福留と達率四比福夫を筑紫国に送り、大野城と桜城の二つの城を築いた⁸⁾。
- ③ この月（11月：引用者）に、倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋嶋城、対馬の金田城を築いた⁹⁾。
- ④ 8月に天皇が高安城に登って城の修理について議論した。しかし、民衆が疲弊すると思い中止した…冬に高安城を修理して城内の田税を徴収した¹⁰⁾。
- ⑤ 2月に高安城を修理し、食糧と塩を貯えておいた¹¹⁾。
- ⑥ 2月丁酉に天皇が高安城に行幸した¹²⁾。
- ⑦ 11月に難波に羅城を築いた¹³⁾。
- ⑧ 9月に新城を視察した。10月に天皇が高安城へ行幸した¹⁴⁾。
- ⑨ 5月に大宰府に大野城、基肆城、鞠智城など3つの城を修理させた。8月に高安城を修理した¹⁵⁾。

6) 小田富士雄, 1980, 「朝鮮式山城と神籠石」『ゼミナール日本古代史』(下); 1985, 「西日本古代山城の研究」, 名著出版, 373等。

서정식, 2013, 「백제산성이 일본 '朝鮮式山城'에 끼친 영향」『역사와 담론』67, 호서사학회.

7) 『日本書紀』卷27, 「天智紀」, 3년 (664) 조, “是歲 於對馬島壱岐島筑紫國等 置防與烽 又於筑紫 柒人堤貯水 名曰 水城”

8) 『日本古紀』卷27, 「天智紀」, 4년 (665) 조, “秋八月 遣達率答体春初 築城於長門國 遣達率億禮福留達率四比福夫 於筑紫國 柒人野及櫻二城”

9) 『日本書紀』卷27, 「天智紀」, 6년 (667) 조, “是月 柒人國高安城 託吉國山田郡原鷲城 對馬國金田城”

10) 『일본서기』 卷27, 「天智紀」, 8년 (669) 조, “秋八月 丁未朔己酉 天皇登高安城 議欲修城 仍惟氏放 止而不作… 是冬 修高安城 收畿内之田租” 84 百濟學報 제31호

11) 『일본서기』 卷27, 「天智紀」, 9년 (670) 조, “二月… 修高安城 稹穀與鹽”

12) 『일본서기』 卷29, 「天武紀」, 4년 (676) 조, “二月… 丁酉 天皇 登於高安城”

13) 『일본서기』 卷29, 「天武紀」, 8년 (680) 조, “十一月… 仍難波築羅城”

14) 『일본서기』 卷30, 「持統紀」, 3년 (689) 조, “九月… 且監新城 冬十月… 天皇幸高安城”

15) 『續日本紀』 卷1, 「文武紀」, 2년 (698) 조, “五月 令人宰府諸治 大野基肆鞠智 三城”

- ⑩ 9月に高安城を修理した。12月に大宰府に三野城と稻積城の二つの城を修理させた¹⁶⁾。
- ⑪ 8月に高安城を廃した¹⁷⁾。
- ⑫ 正月に河内國高安の烽火を廃し、初めて高見の烽火及び大倭国春日の烽火を置いた。8月に高安城へ行幸した¹⁸⁾。
- ⑬ 12月に備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停止した¹⁹⁾。

これが663年以降に築造された朝鮮式山城に関する記録である。非常に簡単な記録ではあるが、文献の記録から次のような幾つかの事実がわかる。

はじめに、朝鮮式山城の築城記録が白村江の戦い以後から現われていることである。周知のように、百済と倭の連合軍は663年8月に行われた白村江の戦いで新羅と唐の連合軍に敗れた²⁰⁾。自然に復興運動の中心地だった周留城も陥落し、多くの百済遺民は日本に亡命した²¹⁾。

このように多くの百済遺民たちが日本に渡った翌年から築城が始まった。そのような点から日本の朝鮮式山城は、唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃してくるかも知れないという危機感の中で築城されたものであることがわかる。これを裏付けるのが〈史料B〉ではないかと思う。

B. 総章元(668)年に至って…また消息を開くと「唐が船を修理することは、表向きは倭国を征伐する」というが、実際は新羅を攻撃しようとする

るものだ」と述べ、民衆がその言葉を聞いて驚き、不安に思いました²²⁾。

〈史料B〉は唐が新羅を攻撃しようすることに対する新羅の人々の不満を語るものであるが、実はどうであれ、実際に唐が日本列島を攻撃するという噂が当時あったことがわかる。また、新羅の人々が噂を聞いて驚き、恐れていたように、日本列島もそうであったことは容易に推測できる。結局、日本の朝鮮式山城は、このような対外的な緊張感の中で築城されたものと見るべきであろう²³⁾。

第二に、前述したように日本の朝鮮式山城は城郭の数は少ないが、正確な築城年代を知ることができるという事実である²⁴⁾。〈史料A〉に見られるように、664年に水城を築造したを始めに、665年に長門国城、大野城、基跡城などが築城され、667年にも高安城、屋嶋城、金田城などが築城された。

周知のように、日本にある朝鮮式山城の源流といえる百済山城の場合、百済山城として知られている遺跡の数は多いが、実際に築城時期を明らかにできる遺跡はほとんどない。さらに、これまで百済山城と信じられてきた遺跡が百済山城なのかどうかという論争が起きる場合もある。例えば、扶余にある青馬山城は百済山城の代表的な存在として知られているが、青馬山城が百済山城として知られるようになったのは、1932年に百済陳列館長として扶余に来た大坂金太郎が『日本書紀』に登場する得爾辛城を青馬山城に比定してからである²⁵⁾。

16) 『奇詮良基』、卷1、「文武紀」、3巻(699)条。『九月内寅 修理高安城…十一月申 令大宰府 修三野稻積二城』

17) 『奇詮良基』、卷2、「文武紀」、大寶 壱年(701)条。『八月丙寅 廢高安城』

18) 『續日本紀』、卷5、「元明紀」、和同 5年(712)条。『正月壬辰 覆河内國高安烽 始置高見烽 及人倭國春日烽…八月庚寅 行幸高安城』

19) 『奇詮良基』、卷8、「元正紀」、養老 3年(719)条。『十二月戊戌 併備後國安那郡茨城 葦田郡常城』

20) 『日本書紀』、卷27、「大智紀」、2月 8卷条。『…戊申 日本仙都初至者 與人唐船御合戰 日本不利而退 人神堅陣而守 己酉 日本諸將與百濟王 不覗氣象 而相謂之! 我等爭先…官軍敗歟』

21) 『日本書紀』、卷27、「天智紀」2月 9卷条。『九月辛亥朔丁巳 百濟州柔城始降於唐…明日發船始向日本』

22) 『一國史記』、卷7、「新羅本紀」7、文武王 11年條、答蔚仁貴書。『全經草元年… 又通消息云 國家修理船艘 外託征伐 倭國 其實欲打新羅 百姓聞之 慸懼不安』

23) 赤司善彦、2017、「大宰府と古代山城の誕生」、「徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生」(発表資料集), 九州国立博物館・熊本県教育委員会、2-3等。

24) 시정석, 2018, 「반방유적『일본신의 百濟－신슈지역』」, 충남역사문화연구원, 74쪽.

25) 최희영, 2003, 「일제 식민지 상황에서의 부여(扶餘) 고적에 대한 재해석과『관광명소』화」, 『미교문화연구』 9-1, 서울대학교 비교문화연구소, 120-124쪽.

大阪金太郎が青馬山城を得爾辛城としたのは明確な根拠があってではなく、内鮮一体を基本方針に定めた朝鮮總督府の植民統治政策を支えるため遺跡を再解釈した結果であった²⁶⁾。その点から青馬山城が百済時代に築城されたのかについては今後詳しく述べる必要がある²⁷⁾。実際、最近になって青馬山城内からは百済・泗沘の横穴式石室墓が発見され²⁸⁾、青馬山城築城時期の見直しが求められている。

また、忠清南道・礼山にある任存城は、百済の復興運動の際に登場する中核的な要塞であると理解されているが²⁹⁾、任存城の立地と構造的な特徴から見て、はたして百済山城なのかについて疑問を抱く見解もあり³⁰⁾、実際最近では城内から統一新羅時代の建物跡が発掘された³¹⁾。極一部分に関する調査であったため、これだけでは断言できないが、少なくとも関連記録や考古学的特徴から見て、現在の礼山郡大興面にある任存城が百済復興運動期に登場する任存城である可能性はそれほど大きくなないと考えられる³²⁾。

第三に、築城が答体春初、憶礼福留、四比福大など百済の遺民によって行われた事実である。そのような点から日本の朝鮮式山城は百済様式の築城法が採用された可能性が高いものと考えられる³³⁾。したがって、これからはこのような山城を「朝鮮式山城」という曖昧な名称で呼ぶのではなく、「百済式山城」と呼ぶのがより適していると考えられる³⁴⁾。

一方、〈史料A〉でもうひとつつづくのは、当時の築城に決定的な役割を果たした人物がすべて達率官位の所持者だったという点である³⁵⁾。周知のとおり、百済には16官位があったが、そのうち達率は第2位の官位に当たる。このような達率官位の所持者はすべて30人と定められていたというが、問題はこのような達率官位の官人が王都5部と地方5方の長官を務めたという³⁶⁾。さらに、5方にいた方領は陥しい山に位置した方城に駐屯し、700人ないし800人から、多くは1,000人の軍隊を擁していた。豊富な軍事知識と山城を築造した知識を備えていたのである。そのような点で、こうした達率官位の所持者が築城を担当したのは至極当然といえる³⁷⁾。実際、長門国城を築造した答体春初と大野城を築造した憶礼福留は671年に日本の朝廷から大山下という官位を受けることになるが、『日本書紀』には彼らが「闘兵法」（兵法に闘う：兵法に通じているの意）にといって兵法に優れていたことが特記されている³⁸⁾。

3. 「朝鮮式山城」と防衛戦術

西日本に位置する朝鮮式山城が〈史料A〉からもわかるように、百済滅亡後、日本に渡った百済の遺民たちの指揮の下、築造されただけに、百済山城と朝鮮式山城が深い関連があろうことは容易に察するに余りある³⁹⁾。そのため、そうした関連性に対する様々なアプローチがあった。

まず、神龍石論争の最中、閑野貞は韓国の踏査

- 26) 김종수, 2016, 「일제강점기 부여 고직의 재해석과 고직관왕의 성격」『문화財』 49-1, 국립문화재연구소, 91쪽.
 27) 서정석, 2007, 「사비도성의 방비체계와 금강」『백제와 금강』, 서경, 109~110쪽.
 28) 김영국 외, 2019, 「부여 청마산성」, 백제문화재연구원, 29~35쪽.
 29) 심경보, 1983, 「百濟復興軍의 主要據點에 對하여」『百濟研究』 14, 160~162쪽.
 30) 이남석, 1999, 「禮山鳳首山城(任存城)의 現況과 特徵」『百濟文化』 28, 221~224쪽.
 31) 오종길 외, 2016, 「禮山任存城 建物址遺蹟」, 백제문화재연구원, 15~33쪽.
 32) 서정석, 2000, 「百濟 5方城의 位置에 대한 考察」『關西考古學』 3, 67~70쪽.
 33) 小田富士雄, 2000, 「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』 44, 137쪽.
 34) 성주현, 1989, 「佛國 古代山城의 日本傳播」『國史部論叢』 2, 1쪽.
 西谷正, 1994, 「朝鮮式山城」『岩波講座 日本書紀』(第3巻) 고대 2, 286쪽.
 서정석, 2012, 「일본 고대 삼성 연구의 위단계」『백제와 주변세계』, 689쪽.
 35) 연민수, 1996, 「西日本 지역의 朝鮮式山城과 그 性格」『韓國古代史論叢』 8, 가와국사학개발연구원, 335쪽.
 36) 『輪苑』 권30, 「善光部」, 百済條.
 37) 연민수, 1996, 앞의 논문, 355쪽.
 38) 『日本書紀』 卷27, 「天智紀」 10년 송정월조, “…以大山下 授達率谷那曾首(闘兵法) 木素貴子(闘兵法) 憶禮福留(闘兵法) 答体春初(闘兵法) …”
 39) 박순세, 2000, 「百濟 泗沘城域の構造」『古文化談叢』 44, 240쪽.

の際に日撃した韓国の中世山城の特徴を探し出し、日本にある「朝鮮式山城」こそ、そのような韓国の中世山城を模倣したものであるという見解を示した⁴⁰⁾。この時、関野貞が提示した韓国の中世山城の特徴は次の4つに要約できる⁴¹⁾。

第一に、王宮は平地や丘陵上に位置し、その裏の陥山に山城を配置して食糧と武器を備蓄しておき、有事の際にはその山城に入りて籠城する。第二に、三国時代の山城の周辺には、必ずそれに関連する多數の古墳が散在する。第三に、上城と石城があるが、山城は主に山峰で求めやすい石材を用いた石城として築城し、平城は土城として築城する。第四に、必ず一ヶ所以上の渓谷部を閉み、稜線から少し下がった所に城壁を築造する。

また、関野貞は「人野城」や「基跡城」のような日本の「朝鮮式山城」こそ、韓国の中世山城を模倣したものであるとした。その後、韓国の中世山城と西日本朝鮮式山城の発掘調査が行われ、両者の関係についても様々なアプローチがあり、その結果、西日本朝鮮式山城の源流を百済山城へと探る研究が続いている⁴²⁾。例えば、ソン・ジュタクは西日本の朝鮮式山城に現れた百済山城の特徴として、以下の6つの事象を挙げている⁴³⁾。

第一に、都城体制において、大宰府都城は政府の都府楼を中心に、後の大野城と前の基跡城、そして西の羅城に当たる水城が位置し、平地城（政府+羅城（郭城）+高地山城（大野城+基跡城））で構成されているが、このような構造が平地城（王宮+羅城（郭城）+山城（扶蘇山城+青馬山城））で構成された潤沢都城と配置体制の面で類似性がある。

第二に、大野城の平面構造は南側と北側に二つの山頂式山城があり、その中央に包谷式山城がある複合式山城の形をしているが、扶蘇山城も山頂式山城と包谷式山城が結合された複合式山城の形をしている。

第三に、築城法において、大野城と扶蘇山城とともに版築技法で築造された土城であり、所々に築石をした痕跡が現れている。

第四に、大野城と扶蘇山城がともに、所々に濠施設が敷設されている。

第五に、大野城の中には倉庫用に使われた建物址があるが、扶蘇山城もその中に軍倉址のような軍事用倉庫が存在する。

第六に、青馬山城は発掘調査がきちんと行われていないため、正確なことは分かっていないが、基跡城のような役割を果たしていた山城と推定される。

このような両者の比較は、文献記録に記された百済遺民による西日本の朝鮮式山城の築造という歴史的事実を立証する興味深い結果ではあるが、両地域の山城に対する本格的な発掘調査が行われる前のことであるため、今日の立場では修正すべき部分があるのも事実である。例えば、複合式山城の場合、一時は百済の典型的な山城として理解されたが⁴⁴⁾、発掘調査によりこのような複合式山城が実のところ百済山城ではないことが確認された。したがって、考古学的な調査に先立ち、西日本の朝鮮式山城に関する文献記録を綿密に分析することが優先されるのではないかと考えられる。実際、西日本にある朝鮮式山城に関連する文献記録を総合的に調べると、次のような事実が見られる。

40) 関野貞、1913、「所謂神龍石は山城址なり」『考古學雑誌』4卷2号；小田富士雄編、1985、『西日本古代山城の研究』、名著出版、90~113等。

41) 関野貞、1913、『左の註』；小田富士雄、1985、『左の註』、96~99等。

42) 鍵山猛、1968、「大宰府都城の研究」、風間吉房。

齊藤忠、1968、「城査考」、『日本古代遺跡の研究』、吉川弘文館。

李進熙、1977、「朝鮮と日本の山城」『城』（上田正昭編）、社會思想社。

成岡輝、1980、「人野城小説」『古文化論叢』、鏡山猛先生古稀記念論文集刊行會。

小川富士雄、1985、「朝鮮式山城と神龍石」『九州古代文化の形成』下巻、學生社。

井上秀雄、1987、「東アジアのなかの古代朝鮮の城郭」『東アジアと日本』、吉川弘文館。

시정석、2013、「明제산성이 일본 “朝鮮式山城”에 끼친 영향」『역사와 문화』67, 호서대학교。

43) 성주탁、1989、『左の註』、18~21等。

44) 윤무봉·성주탁、1977、「百濟山城의 新類型」『百濟研究』8、18~22等。

第一に、白村江の戦いの後、日本列島に登場した最初の防御施設は水城である。〈史料 A-①〉によると、水城が築造されたのは664年12月のことである。百濟の遺民たちが日本列島に渡ったのが663年9月であっただけに、その翌年にすぐ水城が築造されたわけである。

ところが周知のように、水城は一般的な城郭とは異なり遮断城である。城郭は本来、ひとつの地点から出発し、一定の空間を取り囲んだ後、再び山発点に戻ってこそ完成する。少なくとも、廃合されなくても一定の空間が確保されてこそ城郭といえる⁴⁵⁾。そのような点で、水城は一般的な城郭とは異なる。一定の空間を取り囲んだのではなく、唐・新羅連合軍が九州に上陸した場合に備えて、博多湾から大宰府政府に至る中間地点に一文字に築造した長さ1.2kmの遮断城であるためである⁴⁶⁾。水城が築造された当時の状況が如何ほど緊迫していたかを如実に感じさせるものである。

実際、百濟でこのような遮断城を築造した事例はあまり見当たらない。ただし、強いて探せば次のような事例が挙げられるのではないかだろうか。

C-① 秋の7月に禿山柵と狗川柵の二つの木柵を立てて楽浪との通路を塞いた⁴⁷⁾。

② 春に国内の人で15歳以上を徴発し、閂防を設置したが、青木嶺から北には八坤城に達し、西には海に至った⁴⁸⁾。

百濟で遮断城を築造した事例は、まず上記の2つではないかと思われる。上記の2つの事例の他に、東城主の時代、炭峴に柵を設置した事例があ

るが⁴⁹⁾、柵を設置したのみとなっており、正確な形は不明だが、炭峴が新羅から百濟へと来る要衝地であったこと、そして新羅の攻撃に備えて設置されたものであることを考えると、炭峴に設置された遮断城である可能性があると考えられる。

もちろん〈史料 C-①〉の場合、これが遮断城なのかどうかは正確に分からぬが、これが同年4月に楽浪が蘇禰に瓶山柵を攻撃させ、100人余りを捕まえた後の逃亡回避という点で、百濟から樂浪に通じる幹線道路を遮断した遮断城ではないかと思われる。

考古学的に見ると、扶余羅城、つまり泗沘都城の外郭城壁も、一種の遮断城といえるのではないかと考える。もちろん、泗沘都城の外郭城は水城とは異なり、単なる防御施設としての意味だけがある訳ではない。その外側にちょうど陵山里古墳群があるという点で、王都の内外を区分する基準のような意味も持っている。さらに、水城が図1や写真1から見てとれるように、丘陵と丘陵の間に平地に位置しており、典型的な遮断城の形をしているとすれば、泗沘都城の外郭城は丘陵と平地をともに通っており、若干の差が見られるのは事実である。ただ、一定の空間を取り囲んだわけではないという点では、遮断城の一種と見ることもできるのではないかと思う。現在、泗沘都城の外郭をなす城壁は北羅城と東羅城と呼ばれるものが残っている。西羅城と南羅城もあった可能性があるという見解もあるが⁵⁰⁾、北羅城と東羅城だけを築造した可能性も排除できない⁵¹⁾。そのような点で、これも一種の遮断城と見ることができるのではないかと思われる。

45) 『 순영식, 1987, 「韓國 城郭의 研究」, 문화재관리국, 15쪽.

46) 長沼賢高, 1932, 「水城の大癩の調査」『史跡名勝天然記念物調査報告書 第7号』, 福岡県
福岡県教育委員会, 1976, 「水城」(昭和50年度発掘調査報告).

九州歴史資料館, 2009, 「水城跡」(上)・(下).

47) 『一國史記』卷23, 「百濟本紀」1, 은조왕 11년 (서기전 8) 조, “秋七月 設禿山狗川兩柵 以塞樂浪之路”

48) 『삼국사기』卷25, 「백제본기」3, 진사왕 2년 (386) 조, “春 發國內人十五歲已上 戰關防 百青木嶺 北距八坤城 西至於海”

49) 『삼국사기』卷26, 「백제본기」4, 鄂王 22년 조, “七月 設柵於炭峴 以備新羅”

50) 허재선, 1982, 「百濟 調査城研究」, 동국대학교대학원 석사학위논문, 23~34쪽.
성주탁, 1982, 「百濟泗沘都城研究」『百濟研究』13, 32쪽.

51) 田中俊明, 1990, 「上都로서의 泗沘城에 대한 研究의 고찰」『百濟研究』21, 176~179쪽.

박순발·성정용, 2000, 「百濟泗沘遮断城」, 중남대 백제연구소.

박순발 외, 2002, 「百濟泗沘羅城」III, 중남대 백제연구소.



図1 水城位置図

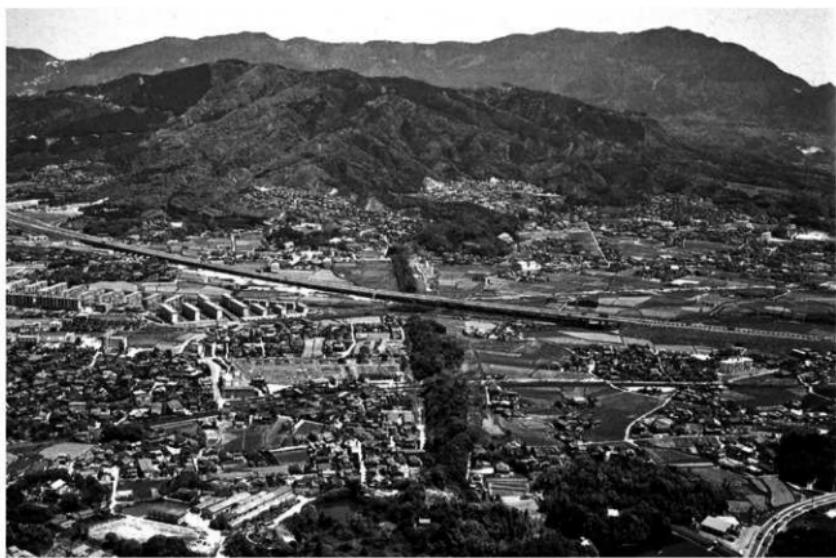


写真1 水城近景（右側が大宰府政庁方向）

このように、水城のような遮断城は百濟の城郭としては極めて異例の事例といえる。しかも、そのような遮断城を平地に築造しているという点に特徴がある。例えば、炭峴に設置した柵は土城ではなく柵ではあるが、炭峴の丘陵部に設置した可能性がある。平地ではなかった可能性が高いという意味である。

実際、今まで確認された百濟山城は全て自然の地形を適切に活用しながら、山峰に築造されているのが特徴である。自然の地形をうまく活用して築城されているため、城壁の外側に急斜面が続いている、実際の城壁の高さよりも大きな防御効果を得ている。そのような点で、水城は遮断城という形態も特異だが、そのような遮断城が平地を通っているという点で、一般的な百濟山城の立地とは異なる。自然の地形を活かしたメリットを全く活かすことができないからである。

このように、水城は形や立地の面で百濟山城とは距離のある防衛施設であることは間違いないく、それが664年に出現したという点で、当時の状況が緊迫していたことの証拠であるとみたい。だが、水城は城郭としては直接比較できる遺跡はないものの、戦術的な側面では、百济において駆使した戦術と類似した側面がある。博多湾と大宰府の間の平地に位置する水城は、丘陵と丘陵の間の細い道を遮断するという点で、660年7月の黄山西伐の戦いと戦術的に似ている面があると考えられるからである⁵²⁾。

黄山西伐の戦いの現場については論山市連山面の漢民大学校付近説⁵³⁾、開泰寺付近説⁵⁴⁾、連山面青銅里梅峰付近説⁵⁵⁾などがあるが、開泰寺付近で

ある可能性が高いと考えられる⁵⁶⁾。開泰寺付近こそ成忠が強調していた「陥しく狭い道」に当たるからである⁵⁷⁾。そうであるとすれば、その地政学的位置は水城の位置に酷似している。つまり、城壁があるかどうかは別だが、狭い道において少數の軍隊で大軍を迎えようとした点に通じる面がある。そのため、日本の大和政権も、百济の遺民も博多湾に上陸し、すぐに大宰府政府まで攻撃してくる唐・新羅連合軍に備え、從来は見られなかつた遮断城という特異な防衛施設を誕生させたのではないかと考えられる。

第二に、本格的な「朝鮮式山城」を築造しようとした時、最初に築造したのが長門国城という事実である。(史料 A-②)のように、水城を築造した翌年(665年)から長門国城、大野城、基跡城など本格的な山城を築造することになるが、そのうち初めて築造されたのが長門国城である。最初に築造したということは、それだけ戦術的価値が高いという意味になるであろう。それでは長門国城はいかにしてこのように戦術的に最も重要な山城になったのであろうか。

大野城や基跡城と違い長門国城は現在その正確な位置がどこなのかわかつていない。遺跡が発見されていないからである。ただし、その名称からして現在の山口県一帯に位置していたことは容易に推測できる。そのため、下関市の唐櫃山説、四王寺山説、茶臼山説などがあり、北九州市門司区の古城山を挙げる見解もある⁵⁸⁾。

ところが、下関市長府町に位置する「火の山」を候補地とする見解がある⁵⁹⁾。この山は(図2)からもわかるように海拔286mの独立丘陵で、そ

52) 서정석, 2010, 「의왕의 진짜과 황산병진부의 신상」『軍史』76, 韓國戰史硏究所.

53) 흥사준, 1967, 『炭峴考』『역사학보』35-36.

54) 신주타, 1990, 『百濟炭峴 小考』『百濟論叢』2, 明體是詩개발연구원.

55) 서정석, 2010, 앞의 논문, 15쪽.

56) 서정석, 2010, 「백제사상 황산병진부와 삼영 선지에 대하여」『충청학과 충청문화』10, 92쪽.

57) 『삼국사기』 권28, 「백제본기」6, 의왕 16년 (656) 조, “若異國兵來 陸路不使過沈峴 水卑不使入伎伎浦之岸 畜其險隘以塞之 然後可也”

58) 曽元國, 1985, 「長門城の所在について」『北九州瀬戸内の古代山城』(小田富士雄編), 名著出版, 320쪽.

59) 曽元國, 1985, 위의 논문, 320쪽.

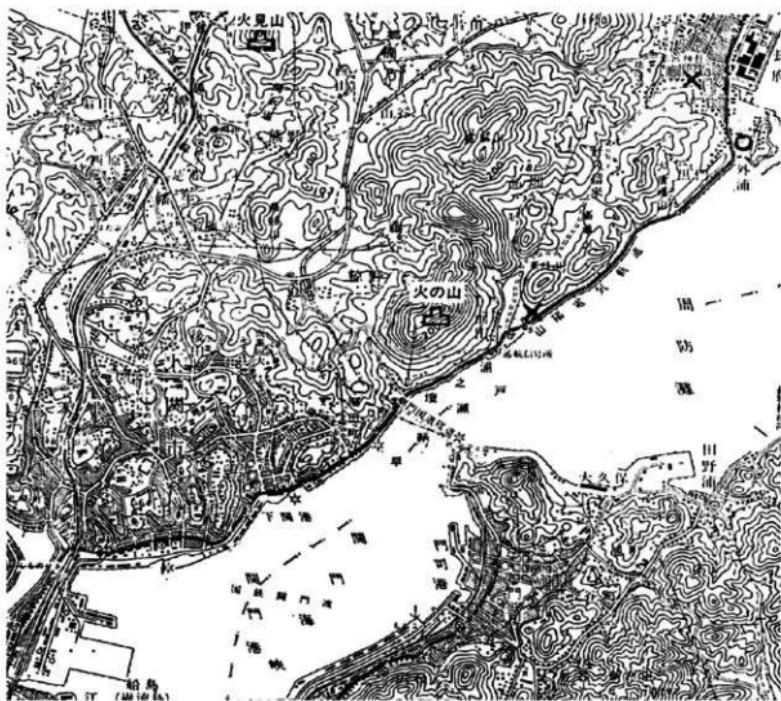


図2 長門国城の推定位置（「火の山」）

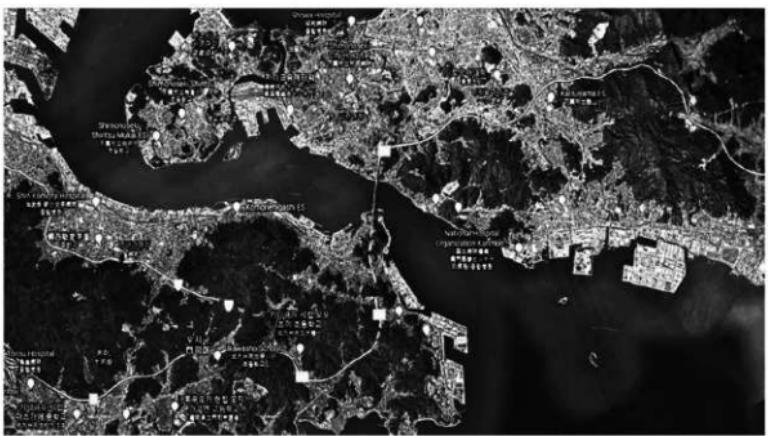


写真2 関門海峡の近景（グーグルアース）

の立地が讃岐の屋島城や備後の茨城に似ている。言い換れば、一般的な「朝鮮式山城」の立地と同様の条件を備えている。

それだけなく、ここは日本の本州と九州の間に位置する関門海峡が一望でき、(写真2)からもわかるように、向かい側には北九州市門司区の古城山⁶⁰⁾が向かい合っていて、関門海峡の中でも最も幅の狭い場所である。ここを天然の要塞であり「日本のスエズ」と呼ぶのもそのためである。そうしたこともあり、この「火の山」の周辺には実際に敏達朝に築造された古城があったという言い伝えもあるという⁶⁰⁾。

このように、瀬戸内海へ入る道なので、朝鮮半島から日本の近畿地方へ行くためには必ず通らなければならない要衝である上、幅が狭く戦術的に非常に重要な所が関門海峡である。もし唐・新羅連合軍が船に乗ってここを通ろうとする時、関門海峡の内側で弓を使って火攻めにすれば、この狭い海峡を無事に通れる船は一枚もないだろう。白済

の遺民が初めてここに山城を築造したのもそのためではなかったかと思われる。言い換れば、まず初めに水城を築造したことからして、人和政権や百済の遺民の第一次戦略は唐・新羅連合軍が九州を占領できないようにすることだったと思われる。このような戦略が失敗に終わった時、第二の戦略として考えたのが、唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにすることだった。最初の朝鮮式山城を長門国に、それも最も狭い関門海峡を制圧できる場所に築造したのはそのためである。

もちろん、唐・新羅連合軍が関門海峡を通過せずに周辺のどこかに上陸することもあり得る。実際、この関門海峡の中ほどにあたる赤間神宮周辺は、朝鮮時代、ここを通った朝鮮通信使が上陸した場所として知られている。ここに港があったという意味になるわけである。したがって、時間の差はあるものの、唐・新羅連合軍が日本列島に侵攻した際、ここに上陸して陸路でここを通過する可能性も完全に排除することはできない。ここに



写真3 聖與山城の位置

60) 豊元國, 1985, 위의 논문, 322쪽.

長門国城を築造したもうひとつの目的は、まさにそうして陸路で進撃する唐・新羅連合軍から防御するためでなかったかと考えられる。

このように上陸して陸路で進もうとする時は、上陸しようとする海浜部を削除し、船に乗って閑門海峡を通過しようとする時は海峡の両側に待ち伏せし、火攻めを加えてこれ以上進めないようにするのが長門国城であった。まさに「水陸の要衝」だったわけである。それで、山城の中で最初にこの山城を築造したのではないかと推測する。

長門国城はこのように海浜部と海峡を同時に制御できる機能を持っていたと考えられる。ここをこのように効果的に制御することさえできたら、唐・新羅連合軍が九州を掌握したとしても、近畿地方まで手中に入れることは非常に困難であっただろう。自然とその位置は「火の山」をはじめとする周辺一帯、つまり閑門海峡からそれほど離れていない場所にあったのではないかと考えられる。閑門海峡から遠いほど、ここを制御するのに不利であったはずだからである。

このように長門国城を「水陸の要衝」と見たとき、そうした防御体系は「加林城」を通じて伎伐浦と錦江を同時に統制した百済の戦略・戦術と似ていて興味深い。

周知のとおり、百済は滅亡する前に、長門国城と同じ位置に城郭を築き、外部勢力の侵入に備えた経験があった。それが他ならぬ加林城である。

加林城は現在の扶余郡林川面の聖興山城に比定される⁶¹⁾。百済が王都の防衛のため、ここに山城を築造したのは東城干23年(501年)であった⁶²⁾。当時の都・公州や泗沘期の王都・扶余は、錦江の

東であるにもかかわらず、王都の防衛のため、山城を錦江の西側に築造したのは錦江河口に位置していた伎伐浦と錦江を同時に制御できる位置に該当するためである。

有事の際、外部勢力が錦江を通じて泗沘都城に到着するためには、伎伐浦に上陸しなければならなかつた。成忠や興首(訳注1)が有事の際、「水軍を伎伐浦の中に入れないようせよ」⁶³⁾と命じたことや、「唐の軍が白村江に入れないようせよ」⁶⁴⁾と命じたのもそのためである。前述したように、川はどこにでも船が停泊できるわけではなかつたため⁶⁵⁾、伎伐浦のような特別な場所でのみ停泊することが可能であった。他の場所は干潟のようになっていたので船を停泊できる場所ではなかつた。したがつて、錦江を通じて泗沘都城を攻撃するためには、伎伐浦から上陸して陸路で泗沘都城まで進むか、または伎伐浦をそのまま通り過ぎ、泗沘都城まで錦江に逆らつて船で進む方法があつた⁶⁶⁾。

訳注1 成忠、興首は、百済の将軍。隋伯と合わせて百濟三人忠臣とされた。

ところで錦江は他の川も同様だが、上流に行くほど幅が狭くなり、川の左右の丘に待ち伏せし、火矢で攻撃すると船は全焼してしまう。船に乗つて泗沘都城まで進むことができなかつたのもそのためだ。百済の大臣たちが「鳥かごの中にいる鳥を絞め、網にかかった魚を捕ると同様」⁶⁷⁾と語つたのがこれである。加林城から第一に伎伐浦の方に軍を送り伎伐浦への上陸を阻止し、それがままならないか、侵入勢力が川を週つて来れば、第二に江境の方へ軍を送り、待ち伏せしながら待つこ

61) 유재체, 1996, 「百濟 加林城研究」『百濟論叢』5, 韓제근화개념연구원.

안승주·서정석, 1996, 『성흥사성문지발굴조사보고서』, 충남발전연구원.

심상육·성현화, 2013, 『성흥사성』(II), 부여군문화재보존센터.

심상육 외, 2017, 『부여 가원성』(I), 백제고도문화재단.

심상육·이명호, 2018, 『부여 가원성』(II), 백제고도문화재단.

62) 『三國史記』卷26, 「百濟本紀」4, 東城王 23년 (501) 소, “八月 奉加林城 以衛士佐下苜加鐵之”

63) 『三國史記』卷28, 百濟本紀」6, 義慈王 16년 (656) 소, “若異國來 陸路小使過沈馴 水平不使人伎伐浦之岸”

64) 『삼국사기』卷28, 『백제본기』6, 의자왕 20년 (660) 소, “…宜能勇力往守之 使唐兵不得入人臣…”

65) 이희진, 2004, 『선흥의 빛경』, 동아시아, 249쪽.

66) 서정석, 2007, 「사비도성의 방비체계와 금강」『백제와 금강』, 서경, 120~122쪽.

67) 『삼국사기』卷28, 『백제본기』6, 의자왕 20년 (660) 소, “當此之時 級兵擊之 譬如殺在瓶之鷄 雜網之魚也”

とのできる所が加林城であった。百済の加林城を「水陸の要衝」⁽⁶⁸⁾と表現したのもそのためである。

長門国城が関門海峡付近のどこかにあったとみる理由がここにある。だからこそ朝鮮式山城の中で最初に長門国城が築造されたとはずである。言い換えれば、今まで伝えられた9つの「朝鮮式山城」のうち、最も重要な城をひとつ挙げるとすれば、まさにこの長門国城になるだろう。大和政権の立場からも百済遺民の立場からも唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃して来れば、防御できる最も有利な場所をここと判断したわけである。それでここに最初の山城を築造したと思われる。

第三に、長門国城や大野城、基肄城を築造した後は、667年に高安城、屋嶋城、金田城を築造し、清野作戦（訳注2）を駆使する準備を整えたという事実である。

訳注2 清野作戦とは城外を焦土化する戦法のこと。

前述したように、大和政権と百済遺民の第一次戦略は、唐・新羅連合軍が九州を占領できないようにしておいた。唐・新羅連合軍であっても、九州を掌握できないまますぐに近畿地方を攻撃することはできないためである。そうするとうちに瀬戸内海で退路でも遮断されれば、唐・新羅連合軍はそれこそ「籠中の鳥、網中の水魚（進退両難）」のような状況になるからである。

唐・新羅連合軍の立場から見ると、まず九州を掌握して橋頭堡を確保した後、ここを足場に瀬戸内海へ進んでこそ近畿地方を攻撃できる。大和政権と百済の遺民から見れば、九州方が唐・新羅連合軍の手中に入ると瀬戸内海や近畿地方を守ることは非常に不利になるが、九州地方を守り抜くことが近畿地方を守ることになるのである。結局、九州地方を誰が掌握するかに勝敗がかかっていたわけである。

それでは九州地方を掌握するというはどういう意味であろうか。それはまさに大宰府政府を誰が制するかが重要な鍵である。もし唐・新羅連合軍が大宰府政府を占領することになれば、それは九州を掌握することになり、人和政権と百済の遺

民が大宰府政府を守り抜くことになれば、唐・新羅連合軍の攻撃を退けることになるわけである。

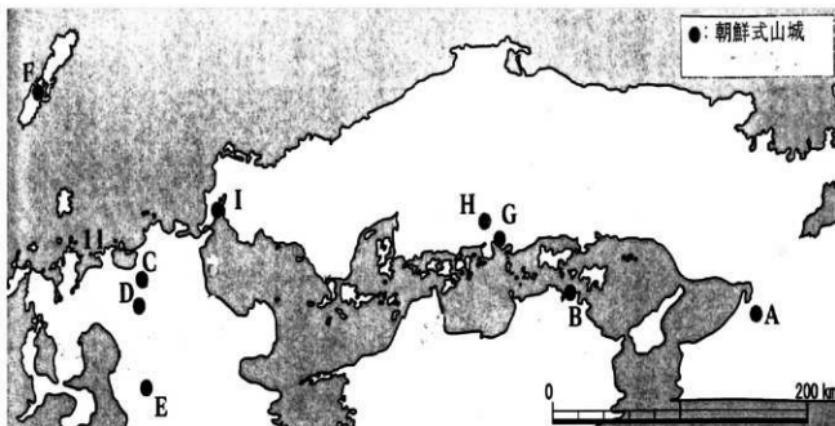
このように、大宰府政府を誰が制するかは九州地方を誰が制圧するかにつながり、九州地方を誰が制圧するかによって近畿地方も誰が制圧するかが決まるため、結局、大和政権や百済の遺民にとっては九州地方を守り抜くのが重要な勝負どころになるほかなかった。長門国城の築造に続き、大宰府政府の周辺に大野城と基肄城を築造したのはそのためだと考えられる。言い換えれば、水城だけでは唐・新羅連合軍の攻撃を防衛するのは困難だと考え、さらに大宰府政府の周辺に防衛力を追加したのが665年にあたる大野城と基肄城の築城である。大宰府周辺にこのような山城を配置することで水城の防衛が崩れると、すぐにこの二つの山城に入り、籠城することで唐・新羅連合軍が九州を掌握できないようにしようとしたのが当時の戦略であったと考えられる。

こうして九州と関門海峡に防衛力を集中させ、第一には九州を防衛し、これがうまくいかなければ、第二に関門海峡を防衛することで、唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにするが665年までの戦略であった。

667年に入り、高安城、屋嶋城、金田城などが追加築造されたのは、唐・新羅連合軍を防衛するための戦略がまた変わったことを意味する。ここでいう高安城は〈図3〉のように大阪南部に位置し、屋嶋城は四国の香川県に位置し、金田城は対馬にある。対馬へ瀬戸内海へ近畿地方に至る長い幹線交通路の要所に山城を築造したわけである。言い換えると、665年までの戦略が関門海峡や九州地方に限られていたとすれば、今度は対馬から近畿地方までの長い戦線を構築した。

唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃するならば、通過が避けられない攻撃ルート周辺に山城を配置したのは、百済、否、共に三国が駆使した「清野作戦」を試みるためだったと考えられる。百済が「清野作戦」を試みたことは真幌城を通じて知ることができる。

68)『삼국사기』卷28, 「백제본기」6, 의자왕 20년 (660) 초, “…或이 加林城水陸之衝 合先擊之…”

図3 朝鮮式山城の分布図⁶⁹⁾

A. 高安城 B. 屋崎城 C. 大野城 D. 基肄城 E. 菊智城
F. 金田城 G. 茨城 H. 常城 I. 長門国城

D. 福信などは、真観城が川に臨み、高く陥しく要衝地にあたるため、軍を投入し守らせた。仁軌が夜に新羅の軍を奮励し、城の胸壁まで肉迫したが、夜が明ける頃に城に入つて800人の首を斬り、ついに新羅の兵糧輸送路を開拓した⁷⁰⁾。

〈史料D〉によると、百濟復興運動当時、復興軍が真観城に駐屯していた時に新羅から扶余の唐・新羅連合軍に伝わる補給品を断ち切ったことにより、泗沘都城に孤立していた唐・新羅連合軍が真観城を攻撃し陥落させたことで、ようやく鎮道（兵站線）が開通したことを明らかにしている。ここでいう「真観城」は、大田市西区黒石洞に位置する黒石洞山城であるが⁷¹⁾、〈史料D〉からもわかるように国境から泗沘城に至る中間地点に位置し、補給品を遮断することで泗沘城に駐屯していた唐・新羅連合軍を苦境に陥れています。これが

まさに清野作戦である。本來、「清野」とは、野原や民家に備蓄されている穀物をすべて山城に移し、敵が一粒の兵糧も取られないようとする計略をいう⁷²⁾。山城防御は、このような清野が並行してこそ効果を發揮できるが、国境線から都に至る幹線道路が長いほど有利である。667年に対馬から大阪までの長い路線に山城を築造したのもそのためと思われる。

つまり、大和政権と百濟の遺民は、唐・新羅連合軍が日本列島を攻撃してくるかもしれないという不安感の中で、第一に九州地方を守る戦略を探査し、万が一の時は瀬戸内海の中に入らないよう、第二の防衛網を構築し、最後には国境から都に至る侵攻路周辺に山城を配置することで、第三の防衛網を構築した。このような防衛網こそ百济が普段構築していた国境防備体系と非常に似通ったものであった。

69) 古代山城サミット実行委員会, 2010, 「あつまれ! 古代山城」, 33쪽을 변경함.

70) 『國史記』卷28, 「百濟本紀」6, 의자왕 20년, 唐 龍朔 2년 (662) 조, “福信等以眞觀城臨江高峻當衝要 加兵守之 仁軌夜督新羅兵 薄城板堞 比明而入城 新殺八百人 途遇新羅饑餓”

71) 심경보, 1983, 「百濟復興軍의主要據點에對하여」『百濟研究』14, 167~168쪽.

서정석, 2002, 「百濟의 城郭」, 학연문화사, 319쪽.

72) 주한熙, 1995, 「工亂中山城修築과 坚壁清野에 대하여」『卒村中延澈教授卒年退任紀念史學論叢』, 621쪽.

4. 結び

西日本には白村江の戦いの後、日本に渡った百済遺民の指揮の下、築城された山城がある。それがいわゆる「朝鮮式山城」である。百済の遺民たちの指揮の下で築造された山城であるため、当然ながら百済の山城と密接な関係があるものと考えられるが、その具体的な実情についてはまだ明らかになっていない。それは両国の山城を比較できるほど発掘調査が十分に行われていないためであろう。したがって、ここでは「朝鮮式山城」の築城に関する文献記録を見てみることで百済山城との関連性を探ってみた。

大和政権と百済の遺民は唐・新羅連合軍が九州地方を掌握できないようにするのが第一次戦略だったようである。大宰府政府の周辺に水城や大野城、基陣城を集中して築造したのはそのためと思われる。

ところが、このような第一次戦略が失敗に終わった時に備えて築造したのが、665年における「長門国城」の築造である。長門国城はまだその実体が確認されておらず、正確な位置はわからないのが実情だが、だとしても長門国に築城したという記録を参考にすると、関門海峡の周辺に位置していた可能性が高いと考えられる。ここに山城を築造した理由は、関門海峡を掌握して唐・新羅連合軍が瀬戸内海に入れないようにするためにであった。これが第二次防衛戦略といえるが、伎伐浦と錦江を掌握することで錦江からの侵入を遮断した百済の防衛体系と非常に類似した防衛戦略であった。

このような第二防衛網を構築しても安心できなかつたのか、対馬から四国、そして近畿地域に至る場所に金田城、崖嶋城そして高安城を築造した。667年のことである。これは国境から工都に至る幹線道路周辺に山城を配置し、有事の際に補給品を遮断することで侵入勢力を苦境に陥れた百済の典型的な山城戦術、つまり「清野作戦」をそのまま再現したものといえる。

このように西日本の「朝鮮式山城」は記録に残っている如く、百済の遺民によって築造されただけに、百済の山城と密接な関連があることがわかる。

山城の位置から見て、百済が普段駆使した山城戦術をそのまま再現したと言っても過言ではない。今後、両地域の山城に対する発掘調査が行われ、構成要素の別にどのような共通点と相違点があるのか、つまびらかに明かされることを期待する。

ソ・ジョンソク 国立公州大学校博物館長

• 『古濟學報 제31호 수록

서일본 '朝鮮式山城'의 축성 기록과 백제산성

서정석*

< 目次 >

I. 머리말

II. '朝鮮式山城'에 대한 문헌 기록

III. '朝鮮式山城'과 방어 전술

IV. 맷음말

국문초록

서일본에는 백제 멸망 후 일본으로 건너간 백제遺民들에 의해 축조된 산성이 있다. 그것을 '朝鮮式山城'이라 부른다. 이러한 조선식산성은 백제 유민들에 의해 축조된 만큼 백제산성과 밀접한 관련이 있을 것으로 생각된다. 다만 아직까지 백제산성과의 관련성은 명쾌하게 밝혀진 것이 거의 없는 실정이다. 그래서 여기에서는 '조선식산성'의 축조 기록을 중심으로 백제산성과의 관련성을 살펴보고자 한다.

'조선식산성'의 축조 기록을 보면 맨 먼저 水城을 축조하고, 이어서 長門國城, 大野城, 基蘿城을 차례로 축조하였다. 이러한 사설로 미루어 볼 때 처음에는 수성을 축조하여 博多灣에서 大宰府로 들어오는 길목을 차단하고자 하였음을 알 수 있다. 이것이 1차 방어방이다. 뒤이어 長門國城을 축조하여 關門海峡을 통제하고자 하였다. 이것이 2차 방어방이다. 그 다음에는 雲馬島에서 시코쿠(四國)를 거쳐 가와치(河内)에 이르는 곳곳에 산성을 배치하였다. 이것이 3차 방어방이다.

이렇게 당시 서일본에는 물샐 틈 없는 방어방이 구축되어 있었는데, 이는 백제가 구축한 방어체계와 매우 유사하여 백제 유민들의 지휘하에 산성이 축조되었다는 역사적 사실을 뒷받침해 주고 있다.

주제어: 조선식산성, 水城, 長門國城, 清野作戰

* 공주대학교 문화재보존과학과 교수

I. 머리말

서일본에 백제 유민들에 의해 축조된 고대산성이 자리한다는 것은 이미 널리 알려진 사실이다.¹⁾ 이러한 산성은 한데 朝鮮式山城과 神籠石²⁾으로 나누어 보기도 하였는데, 그 때문에 神籠石의 성격을 둘러싸고 100년에 걸쳐 치열한 논쟁이 이어지기도 하였다.³⁾

1963년부터 시작된 'おつば川神籠石'의 발굴을 계기로 그때까지 神籠石으로 불리오던 것이实은 방어용의 산성임이 밝혀지면서⁴⁾ 神籠石은 神籠石式山城으로 부르게 되었고,⁵⁾ 이제는 朝鮮式山城과 神籠石式山城을 구별하지 않고 다 같이 고대산성으로 부르고 있다.⁶⁾

조선식산성은 물론이고, 神籠石式山城 또한 산성임이 분명한 이상 단순히 문헌기록에 그 명칭이나 축성 기사가 보인다는 이유만으로 조선식산성이 라 부르고, 그러한 명칭이나 축성 기록이 보이지 않는다는 이유만으로 神籠石式山城이라 하여 양자를 구별해 보는 것은 문제가 아닐 수 없다. 다만 神籠石式山城에 대해서는 아직까지 축성 시기나 축성 목적이 분명하게 밝혀지지 않은 이상 그 성격이나 축성 시기가 밝혀질 때까지는 양자를 서로 구별해 보는 것도 전혀 무의미한 일은 아니라고 생각된다. 여기에서 특별히 조선식산성만을 떼어서 살펴보고자 하는 것도 그 때문이다.

주지하듯이 조선식산성은 663년에 있었던 백제 강전후 후 일본으로 방향한 백제 귀족들의 지휘하에 서일본에 축성된 산성을 말한다. 그러한 산성을 '朝鮮式山城'이라고 부르는 이유도 거기에 있다. 다시 말해서 한국 스타일의 산성이라는 뜻이다.

이렇게 백제 귀족의 지휘하에 탄생한 만큼 조선식산성이 백제산성과 밀접한 관련이 있으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다.⁷⁾ 그런데도 아직까지 양자의 관련성은 그다지 명쾌하게 밝혀지지 않고 있다. 양자를 직접적으로 비교할 수 있을 만큼 충분한 발굴조사가 이루어지지 않았기 때문일 것이다. 그래서 여기에서는 조선식산성의 축성과 관련된 문헌기록을 검토하고, 그것을 바탕으로 백제산성과 서일본 조선식산성과의 관련성을 살펴보고자 한다.

II. '朝鮮式山城'에 대한 문헌 기록

앞에서도 설명하였듯이 서일본의 고대산성은 일반적으로 朝鮮式山城과 神龍石式山城으로 나누어 보고 있다. 여기서 말하는 조선식산성은 「日本」紀나 「續日本紀」와 같은 문헌기록에 성곽의 명칭이나 축성 기사, 혹은 수축 기사가 등장하는 성곽을 말하는 것이고, 유적은 있지만 그러한 城名이나 축성 기사 등이 문헌기록에 보이지 않는 성곽이나 예부가 기준인 샘이다.

일본에는 이렇게 축성 기사가 있는 산성이 있기 때문에 유적은 몇 개 안 되지만 축성 시기를 분명하게 알 수 있는 산성이 있는 반면에 백제 故地에는 산성은 많지만 축성 시기를 알 수 있는 유적이 거의 없다. 따라서 앞으로 백제산성이나 조선식산성을 연구하기 위해서는 서로가 부족한 부분을 보완한 필요가 있다고 생각한다. 그런 점에서 먼저 조선식산성에 대한 문헌 기록을 살펴볼 필요가 있을 듯하다.

- A-① 이 해에 對馬島, 宗岐島, 筑紫國 등에 防人을 두고 봉화를 설치하였다. 또 筑紫에 큰 세방을 쌓고 물을 저장해 두었는데, 이를 이름하여 水城이라 한다.⁷⁾
- ② 8월에 連率 答林春初를 艮門國에 보내 城을 쌓게 하였다. 連率 憶禮福留와 連率 四比福夫를 筑紫國에 보내 人野城과 機城 등 두 개의 성을 쌓게 하였다.⁸⁾
- ③ 이 달(11월:인용자)에 委國의 高安城, 薫吉國 山田郡의 佐鳴城, 對馬島의 金田城을 축조하였다.⁹⁾
- ④ 8월 천황이 高安嶺에 올라 城을 수리하는 것을 의논하였다. 그러나 백성들이 피곤하리라 여겨 중지하였다 … 겨울에 高安城을 수리하고 繩內의 田稅를 기두어 들었다.¹⁰⁾
- ⑤ 2월에 高安城을 수리하고, 곡식과 소금을 쌓아 두었다.¹¹⁾
- ⑥ 2월 丁酉에 천황이 高安城에 행차하였 다.¹²⁾

- ⑦ 11월에 雜波에 罷城을 쌓았다.¹³⁾
- ⑧ 9월에 新城을 시찰하였다. 10월에 친왕이 高安城에 행차하였다.¹⁴⁾
- ⑨ 5월에 大宰府로 하여금 大野城, 基羅城, 麻智城 등 3개의 성을 수리하도록 하였다. 8월에 高安城을 수리하였다.¹⁵⁾
- ⑩ 9월에 高安城을 수리하였다. 12월에 大宰府로 하여금 二野城과 稲積城 등 두 성을 수리하게 하였다.¹⁶⁾
- ⑪ 8월에 高安城을 廢하였다.¹⁷⁾
- ⑫ 정월에 河内國 高安의 烽火를 폐하고, 처음으로 高見의 烽火 및 大倭國 忽日의 烽火를 두었다. 8월에 高安城에 행차하였다.¹⁸⁾
- ⑬ 12월에 鹿後國 安那郡의 荏城, 荏州郡의 常城을 停止하였다.¹⁹⁾

이것이 663년 이후 축조된 조선식산성에 대한 기록이나, 대단히 간단한 기록이기는 하지만 문헌기록을 통해 다음과 같은 몇 가지 사실을 알 수 있다.

첫째, 조선식산성에 대한 축성 기록이 백제강전 후 이후부터 나타난다는 사실이다. 주지하는 바와 같이 백제와 왜의 연합군은 663년 8월에 있었던 백제강전부에서 나당연합군에게 패하였다.²⁰⁾ 자연히 부흥운동의 중심지였던 周留城도 함락되고 많은 백제 遺民들은 일본으로 망명하였다.²¹⁾

이렇게 많은 백제 遺民들이 일본으로 건너간 그 이듬해부터 축성이 시작되었다. 그런 점에서 일본의 조선식산성은 나당연합군이 일본 영토를 공격해 육지로 모른다는 위기감 속에서 축성된 것임을 알 수 있다. 이를 뒷받침해 주는 것이 <사료 B>가 아닐까 한다.

B. 總章 元年에 이르러… 또 소식을 들으리 '나' 이 배를 수리하는 것은 겉으로는 倭國을 정벌한다고 하지만 실제로는 新羅를 치고자 하는 것이다'하여 백성들이 그 말을 듣고 놀라고 두려워서 불안해 하였습니다.²²⁾

<사료 B>는 당나라가 신라를 공격하고자 하는 것에 대한 신라인들의 불만을 말하는 것인데, 사실

이야 어떠하든 간에 실제로 당나라가 일본 열도를 공격한다는 소문이 당시에 있었던 것을 알 수 있다. 아울러 신라인들이 소문을 듣고 놀라워 하였듯이 일본 열도 또한 그러했으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다. 결국 일본의 조선식산성은 이러한 대외적인 긴장감 속에서 축성된 것이라고 보아야 할 것이다.²³

둘째, 앞에서도 설명하였듯이 일본의 조선식산성은 성곽의 수는 얼마 안 되지만 정화한 축성 연대를 알 수 있다는 사실이다.²⁴ <사료 A>에서 보듯이 664년에 水城을 축조한 것을 시작으로 665년에 長門國城, 大野城, 基肄城 등이 축성되었고, 667년에도 高安城, 厥鷦城, 金山城 등이 축성되었다.

주지하는 바와 같이 일본에 있는 조선식산성의 원류라 할 수 있는 백제산성의 경우, 백제산성으로 알려진 유적의 수는 많지만 정작 축성 시기를 분명히 알 수 있는 유적은 거의 없다. 심지어 기존에 백제산성이란 믿어왔던 유적이 백제산성인지 아닌지 논란이 되는 경우도 있다. 예컨대 부여에 있는 南山城은 대표적인 백제산성으로 알려져 있지만, 청마산성이 백제산성으로 알려지게 된 계기는 1932년에 백제진연관 관장으로 부여에 온 오사카긴타로(大坂金太郎)가 「일본서기」에 나오는 得爾^{ナリ}城을 청마산성에 비정하면서부터다.²⁵

오사카긴타로가 청마산성을 득이신성이라고 한 것은 뚜렷한 근거가 있어 그런 것은 아니고, 内鮮一體를 기본 방침으로 정한 조선총독부의 식민통치 정책을 뒷받침하기 위해 유적을 재해석한 결과였다.²⁶ 그런 점에서 청마산성이 백제 때 축조한 것인지에 대해서는 앞으로 면밀히 따져볼 필요가 있을 듯하다.²⁷ 실제로 최근 청마산성 내에서는 백제 사비기의 횡현석식설묘가 발견되어²⁸ 청마산성의 축성 시기에 대한 재검토를 요구하고 있다.

또 충남 예산에 있는 任存城은 백제 부흥운동 때 등장하는 핵심적인 據城으로 이해되고 있지만,²⁹ 임존성이의 입지와 구조적인 특징으로 볼 때 과연 백제산성인지에 대해 의심하는 견해도 있고,³⁰ 실제로 최근에는 성내에서 통일신라 때의 건물지가 발굴되기도 하였다.³¹ 지극히 일부분에 대한 조사였기 때문에 이것만으로 단언할 수는 없지만, 적어도 관련 기록이나 고고학적 특징으로 볼 때 현제의 예

산군 대홍면에 있는 임존성이 백제 부흥운동기에 등장하는 임존성일 가능성은 그다지 크지 않다고 생각된다.³²

셋째, 축성이 答答春初, 憶禮福留, 四比福大 등 백제 遺民들에 의해 이루어졌다는 사실이다. 그런 점에서 일본의 조선식산성은 백제 양식의 축성법이 채용되었을 가능성이 높은 것이 아닌가 한다.³³ 따라서 앞으로는 이러한 산성을 '조선식산성'이라는 애매한 명칭으로 부를 것이 아니라 '백제식산성'으로 부르는 것이 더 적합하다는 생각이다.³⁴

한편, <사료 A>에서 또 하나 눈에 띄는 사실은 당시 축성에 결정적인 역할을 했던 인물들이 모두 連率 관등의 소지자였다는 점이다.³⁵ 주지하다시피 백제에는 16관등이 있었는데, 그 중 달솔은 제 2위 관등에 해당된다. 이러한 달솔 관등의 소지자는 모두 30인으로 정해져 있었다고 하는데, 문제는 이러한 달솔 관등의 관인이 工都 5部와 지방 5方의 장관을 지냈다고 한다.³⁶ 뿐만 아니라 5방에 있던 方領들은 협산에 자리한 方城에 주둔해 있으면서 700명 내지 800명에서 많게는 1,000명에 이르는 군대를 거느리고 있었다. 풍부한 군사지식과 산성 축조 지식을 갖추고 있었던 셈이다. 그런 점에서 이러한 連率 관등의 소지자들이 축성을 담당한 것은 너무나 당연하다고 할 수 있다.³⁷ 실제로 長門國城을 축조한 答答春初와 人野城을 축조한 憶禮福留는 671년에 일본 조정으로부터 大山下의 관위를 받게 되는데, 「일본서기」에는 이들이 '開兵法'이라 하여 병법에 뛰어났음을 특기하고 있다.³⁸

III. '朝鮮式山城'과 방어 전술

서일본에 자리하고 있는 조선식산성이 <사료 A>에서 보듯이 백제 멸망 후 일본으로 건너간 백제 유민들의 지휘하에 축조된 만큼 백제산성과 조선식산성이 깊은 관련이 있으리라는 것은 쉽게 짐작하고 도 남음이 있다.³⁹ 그래서 그러한 관련성에 대한 다양한 접근이 있었다.

먼저 神龍^{ミンラン} 4는쟁이 한창일 때 關野貢은 한국을 납사하면서 목격한 한국 고대 산성의 특징을 찾아내고, 일본에 있는 '조선식산성' 이야기로 그러한 한국 고대 산성을 그대로 보방한 것이라는 견해를 제

시하였다.⁴²⁾ 이때 關野貞이 제시한 한국 고대 산성의 특징은 다음과 같이 4가로 요약된다.¹¹⁾

첫째, 왕궁은 평지나 구릉상에 자리하고, 그 뒤의 險山에 산성을 배치하여 석랑과 무기를 비축해 두었다가 유사시에는 그 산성에 들어가 놓성한다. 둘째, 삼국시대 산성의 주변에는 반드시 그와 관련된 다수의 고분이 산재한다. 셋째, 토성과 석성이 있되 산성은 주로 山峰에서 구하기 쉬운 석재를 이용한 석성으로 축조하고, 평지성은 토성으로 축조한다. 넷째, 반드시 한 곳 이상의 계곡부를 에워싸고, 능선에서 약간 내려간 곳에 성벽을 축조한다.

아울러 關野貞은 大野城이나 基肄城과 같은 일본의 '조선식산성'이야말로 한국 고대 산성을 그대로 모방한 것이라고 하였다.

그 후 한국 고대 산성과 서일본 조선식산성에 대한 발굴조사가 이루어지면서 양자간의 관계에 대한 다양한 접근이 이루어졌는데, 그 결과 서일본 조선식산성의 원류를 백제산성에 찾는 연구가 이어지고 있다.⁴³⁾ 예컨대 성주탁은 서일본의 조선식산성에 나타난 백제산성의 특징으로 다음과 같은 여섯 가지 사실을 들고 있다.⁴⁴⁾

첫째, 도성체제에 있어 大宰府都城은 政廳인 都府樓를 중심으로 郡후의 大野城과 앞쪽의 基肆城, 그리고 서쪽으로 義城에 해당되는 水城이 자리하고 있어 平地城(政廳+羅城(郭城)) + 高地山城(人野城+基肆城)으로 구성되어 있는데, 이러한 구조가 平地城(平宮+羅城(郭城)) + 산성(부소산성+청마산성)으로 구성된 사비도성과 체제면에서 유사성이 있다.

둘째, 人野城의 평면 구조는 남쪽과 북쪽에 두 개의 테뫼형산성이 있고, 그 중앙에 포곡식산성이 있는 복합식산성의 형태를 하고 있는데, 부소산성 역시 테뫼형산성과 포곡식산성이 결합된 복합식산성의 형태를 하고 있다.

셋째, 축성법에 있어서 人野城과 부소산성이 다같이 관축기법으로 축조한 토성이며, 군데군데 석축을 한 혼적이 나타나고 있다.

넷째, 人野城과 부소산성이 다 같이 곳에 따라 城子시설이 부설되어 있다.

다섯째, 大野城 안에는 창고용으로 쓰여 진 건물지가 자리하고 있는데, 부소산성 역시 그 안에 군창

지와 같은 군사용 창고가 자리하고 있다.

여섯째, 青馬山城은 발굴조사가 제대로 이루어지지 않아 정확한 것은 알 수 없지만 基肆城과 같은 역할을 하던 산성으로 추정된다.

이러한 양자의 비교는 문헌 기록에 나타난 백제道臣에 의한 서일본 조선식산성의 축조라는 역사적 사실을 입증해 주는 흥미로운 결과이기도 하지만, 두 지역의 산성에 대한 본격적인 발굴조사가 이루어지기 전 이야기기 때문에 오늘날의 입장에서는 수정되어야 할 부분도 있는 것이 사실이다. 예컨대 복합식산성의 경우 한 때는 백제의 전형적인 산성으로 이해되기도 하였지만⁴⁵⁾ 발굴조사를 통해 이러한 복합식산성이 실은 백제산성이 아닌 것이 확인되었다. 따라서 고고학적 조사에 앞서 서일본 조선식산성에 대한 문헌기록을 면밀하게 따져보는 것이 우선이지 않을까 한다. 실제로 서일본에 있는 조선식산성과 관련된 문헌 기록을 면밀히 살펴보면 다음과 같은 사실을 발견할 수 있다.

첫째, 백제강전부 후 일본 열도에 놓장한 최초의 방어시설은 水城이다. 사료 <A-①>에 의하면 水城이 축조된 것은 664년 12월의 일이다. 백제 道臣들이 일본 열도로 건너간 것이 663년 9월이었던 만큼 그 이듬해에 끝마친 水城이 축조된 것이다.

그런데 주지하다시피 水城은 일반적인 성곽과 달리 차남성이다. 성곽은 원래 한 지점에서 출발하여 일정 공간을 에워싼 다음, 다시 출발점으로 돌아와야 완성된다. 적어도 廢墟이 되지 않더라도 일정 공간이 확보되어야만 성곽이라고 할 수 있다.⁴⁶⁾ 그런 점에서 水城은 일반적인 성곽과 차이가 있다. 일정한 공간을 에워싼 것이 아니라 나당역합군이九州에 상륙했을 때를 대비하여 博多灣에서 大宰府政廳 이르는 중간지점에 一子 형태로 축조한 길이 1.2km의 차단성이기 때문이다.⁴⁷⁾ 그런 점에서 일반적인 성곽과는 다르다. 水城이 축조될 당시의 상황이 얼마나 긴박했었는가를 고스란히 느낄 수 있는 대목이다.

사실 백제에서 이러한 차단성을 축조한 사례는 잘 드러나지 않는다. 다만 군이 찾는다면 다음과 같은 사례를 볼 수 있지 않을까 한다.

을 세워 나랑과의 통로를 막았다.⁵⁷⁾

- ② 봄에 나라 안 사람으로 15세 이상은 정 말하여 防禦을 설치하였는데, 唐木船에 서 북쪽으로는 八坤城에 닿았고, 서쪽으로는 바다에 이르렀다.⁵⁸⁾

백제에서 차단성을 축조한 사례는 일단 위의 두 가지가 아닌가 한다. 위의 두 사례 이외에 동성왕 때 碳船에柵을 설치한 사례가 있는데,⁵⁹⁾

책을 설치했다고만 되어 있어 정확한 형태를 알 수 없지만 탄현이 신라에서 백제로 오는 9.충지라는 사실, 그리고 신라의 공격을 대비해 설치한 것이라는 사실을 감안해 볼 때 탄현 위에 설치한 차단 성의 가능성이 있다고 생각한다.

물론 사료 <C-①>의 경우 이것이 차단성인지 아닌지는 정확히 알 수 없는 것이 사실인데, 이것이 그해 4월에 나랑이 밀갈을 시켜 槻에 檇을 공격하여 1백 여 명을 잡아간 후속조치라는 점에서 백제에서 나랑으로 놓하는 간선도로를 차단한 차단성이 아닌가 한다.

고학적으로 본다면 부여 나성, 즉 사비도성의 외곽 성벽도 일종의 차단성으로 볼 수 있지 않을까 한다. 물론 사비도성의 외곽성은 水城과 달리 단순히 방어시설로서의 의미만 있는 것은 아니다. 그 바깥쪽에 곧바로 농산리고분군이 자리하고 있다는 점에서 十都의 내외를 구분하는 기준과 같은 의미도 담고 있다. 뿐만 아니라 水城이 <그림 1>이나 <사진 1>에서 보듯이 구릉과 구릉사이의 평지에 자리하고 있어 전형적인 차단성의 형태를 하고 있다면 사비도성의 외곽성은 구릉과 평지를 다 같이 지나고 있어 약간의 차이를 보이는 것이 사실이다. 다만 일정 공간을 예외로 하는 점에서는 차단 성의 일종으로 볼 수도 있지 않을까 한다.

현재 사비도성의 외곽을 이루는 성벽은 북나성과 동나성이 뿐인 것이 남아 있다. 서나성과 남나성도 있었을 가능성이 있다는 견해도 있지만,⁶⁰⁾ 북나성과 동나성만 축조하였을 가능성을 배제할 수 없다.⁶¹⁾ 그런 점에서 이것도 일종의 차단성으로 볼 수 있지 않을까 한다.

이렇게 水城과 같은 차단성은 백제의 성곽으로 써는 대단히 이례적인 사례라고 볼 수 있다. 더구나

그러한 차단성을 평지에 축조하였다는데 특징이 있다. 예를 들어 탄현에 설치한 檇은 토성이 아니라 檇이기는 하지만 탄현 정상부에 설치했을 가능성 있다. 평지가 아니었을 가능성이 높다는 뜻이다.

사실 지금까지 확인된 백제산성은 모두가 자연지형을 적절히 활용하면서 川峰에 축조되어 있는 것이 특징이다. 자연지형을 잘 활용하여 축성하였기 때문에 성벽 바깥쪽으로 급경사면이 이어지고 있어 실제 성벽의 높이보다 훨씬 큰 방어 효과를 거두고 있다. 그런 점에서 水城은 차단성이라는 형태도 특이하지만 그러한 차단성이 평지를 지나고 있나는 점에서 일반적인 백제산성의 입지와는 차이를 보인다. 자연지형을 활용한 잇점을 전혀 살릴 수 없기 때문이다.

이처럼 水城은 형태나 입지면에서 백제산성과는 거리가 있는 방어시설임에 불워없고, 그것이 664년에 출현하였다는 점에서 그만큼 당시 상황이 긴박하게 돌아가고 있었다는 반증이라고 보고 싶다.

그런데 水城은 성곽으로는 직접 비교할 수 있는 유적이 없지만 전술적인 측면에서는 백제에서 구사한 전술과 유사한 측면이 있다. 博多灣과 人宰府 사이의 평지에 자리하고 있는 水城은 구릉과 구릉사이의 좁은 길목을 차단한다는 점에서 660년 7월에 있었던 황산별전투와 전술적으로 비슷한 면이 있다고 생각되기 때문이다.⁶²⁾

황산별전투의 현장에 대해서는 『는산시 연산면의 한민대학교 부근 설⁶³⁾ 『開泰寺 부근 설⁶⁴⁾ 連山面 南銅里 매봉 부근 설⁶⁵⁾ 등이 있는데, 개태사 부근일 가능성이 높다고 생각한다.⁶⁶⁾ 개태사 부근이야말로 성충이 그토록 강조하면 '험하고도 좁은 길'에 해당되기 때문이다.⁶⁷⁾ 그렇다면 그 지정학적인 위치는 水城이 자리한 위치와 매우 흡사하다. 즉 성벽이 있느냐 없느냐의 차이는 있지만 좁은 길목에서 소수의 군대로 人卒을 맞이하고자 했던 점이 통하는 면이 있다. 그렇기 때문에 일본 야마토정권도, 백제 유민도 博多灣에 상륙하여 곧바로 大宰府 政廳으로 들어타친 나당연합군을 대비하여 종래에 볼 수 없었던 차단성이라는 특이한 방어시설을 탄생시킨 것이 아닌가 한다.

둘째, 본격적인 '조선식산성'을 축조하고자 하였을 때 가장 먼저 축조한 것이 長門國城이라는 사

실이다. 사료 <A-②>에서 보듯이 水城 을 축조한 그 이름해(665)부터 長門國城, 大野城, 基肄城 등 본격적인 산성을 축조하게 되는데, 그 중 처음으로 축조한 것이 長門國城이다. 가장 먼저 축조했다는 것은 그만큼 전술적인 가치가 높다는 의미가 될 것이다. 그렇다면 長門國城은 어떻게 해서 이렇게 전술적으로 가장 중요한 산성이 되었을까.

人野城이나 基肄城과 달리 長門國城은 현재 그 정확한 위치가 어디인지 알지 못하고 있다. 유적이 발견되지 않고 있기 때문이다. 다만 그 명칭으로 보았을 때 현재의 三日縣 일대에 자리하였으리라는 것은 쉽게 짐작해 볼 수 있다. 그래서 下關市 的 所櫛山說, 四十寺山說, 茶臼山說, 등이 있고, 門司市 的 古城山을 꼽는 견해도 있다.⁵⁸⁾

그런데 下關市 長府町에 위치한 '火の山' 을 후보지로 보는 견해가 있다.⁵⁹⁾ 이 산은 <그림 2>에서 보듯이 해발 286m의 드넓은 구릉으로, 그 입지가 譲岐의 島嶼城이나 備後의 苇城과 흡사하다. 다시 말해서 일반적인 '조선식산성'의 입지와 비슷한 조건을 갖추고 있다.

뿐만 아니라 이곳은 일본의 本州와 九州 사이에 놓여 있는 關門海峡을 한눈에 조망할 수 있고, <사진 2>에서 보듯이 바로 건너편으로는 門司市의 古城川에 마주보고 있어 關門海峡 중에서도 가장 폭이 좁은 곳이다. 이곳을 친연의 요새이자 '일본의 수에즈'라고 부르는 것도 그 때문이다. 그래서 그런지 이 '火の山' 주변에는 실제로 故達朝에 축조한 古城이 이곳에 있었다는 전언도 있다고 한다.⁶⁰⁾

이렇게 潮戶內海로 들어가는 길목이라서 한반도에서 일본 近畿地域으로 가기 위해서는 반드시 거쳐야 하는 요충인 데다가 폭이 좁아 전술적으로 대단히 중요한 곳이 關門海峡이다. 만약 나당연합군이 배를 타고 이곳을 지나가고자 할 때 關門海峡 양쪽에서 화을 이용하여 火攻을 하면 이 좁은 해협을 무사히 통과할 수 있는 배는 한척도 없을 것이다. 백제 유민이 이곳에 가장 먼저 산성을 축조한 것도 그 때문 아니었을까 한다. 다시 말해서 가장 먼저 水城 을 축조한 것으로 보아 大和 정권이나 백제 遺民들의 1차적인 전략은 나당연합군이 九州를 점령하지 못하도록 하는 것이었다고 생각된다. 이러한 전략이 실제로 놀라웠을 때 두 번째 전략으로

생각한 것이 나당연합군이 세토내해(瀬戸内海)로 들어서지 못하도록 하는 것이었다. 최초의 조선식산성유 長門國에, 그것도 가장 좁은 關門海峡을 제압할 수 있는 곳에 축조한 것은 그 때문이다.

물론 나당연합군이 關門海峡을 통과하지 않고 주변 어딘가에 상륙할 수도 있다. 실제로 이 關門海峡의 중간 쪽에 해당되는 赤間神宮 주변은 조선시대 때 이곳을 지나던 조선통신사가 상륙한 곳으로 알려져 있다. 이곳에 항구가 있었다는 의미가 될 것이다. 따라서 시간차가 나기는 하지만, 나당연합군이 일본 열도를 침공한다고 했을 때 이곳에 상륙하여 육로로 이곳을 통과할 가능성도 완전히 배제할 수는 없다. 이곳에 長門國城을 축조한 또 하나의 목적은 바로 그렇게 육로로 진격하는 나당연합군을 방어하기 위함이 아니었을까 한다.

이처럼 상륙하여 육로로 진전하고자 할 때에는 상륙하고자 하는 浦口를 제압하고, 배를 타고 關門海峡을 통과하고자 할 때에는 해협의 양쪽에 배복해 있거나 火攻을 가함으로써 더 이상 전진하지 못하도록 할 수 있는 곳이 長門國城이었다. 그야말로 '水陸의 費衝' 이었던 셈이다. 그래서 산성 중에서 가장 먼저 이 산성을 축조한 것이 아닌가 한다.

長門國城은 이렇게 浦口와 海峽을 동시에 제어할 수 있는 기능을 갖고 있었다고 생각된다. 이곳을 이렇게 효과적으로 제어할 수만 있다면 나당연합군이 九州를 장악했다 하더라도 近畿地域을 수중에 넣기는 대단히 어려웠을 것이다. 자연히 그 위치는 '火の山'을 비롯한 주변 일대, 다시 말해서 關門海峡에서 그다지 멀지 않은 곳에 자리하고 있었던 것이 아닐까 한다. 關門海峡에서 멀지 멀수록 이곳을 제어하기에 불리했을 것이기 때문이다.

이렇게 長門國城을 '水陸의 費衝' 이라고 보았을 때 그러한 방어체계는 加林城을 통해 기별포와 금강을 동시에 통제하였던 백제의 전략·전술과 닮아 있어 흥미롭다.

주시하나시피 백제는 멀망하기 전에 長門國城과 같은 위치에 성곽을 쌓아 외부 세력의 침입에 대비했던 경험이 있었다. 그것이 다름 아닌 加林城이다.

가impan은 지금의 부여군 임천면에 있는 성홍산성으로 비정된다.⁶¹⁾ 백제가 왕도 방비를 위해 이곳에 산성을 축조한 것은 농성왕 23년(501)이었다.⁶²⁾ 다

시의 왕도 공주나 사비기의 왕도 부여는 금강의 농쪽임에도 왕도 방비를 위한 산성을 금강의 서쪽에 축조한 것은 금강 하구에 자리하고 있던 伎伐浦와 금강을 동시에 세어할 수 있는 위치에 해당되기 때문이다.

유사시에 외부 세력이 금강을 통해 사비도성에 이르기 위해서는 伎伐浦에 상륙하지 않으면 안 되었다. 成忠이나 興首가 유사시 ‘水軍을 伎伐浦 안으로 들어오지 못하게 하라’⁶³⁾고 한 것이나 ‘당나라 군사가 山江에 들어오지 못하게 하라’⁶⁴⁾고 주문한 것도 그 때문이다.

앞에서도 설명하였듯이 강은 아무 곳에나 배를 정박할 수 있는 것이 아니어서⁶⁵⁾ 기별포와 같은 특별한 장소에서만 정박이 가능하였다. 나머지 다른 곳은 갯벌처럼 뛰어 있어서 배를 댈 수 있는 곳이 아니었다. 따라서 금강을 통해 사비도성을 공격하기 위해서는 기별포에서 상륙하여 육로로 사비도성까지 나아가든지 아니면 기별포를 그대로 지나친 다음 사비도성까지 금강을 거슬러 배로 나아가는 방법이 있었다.⁶⁶⁾

그런데 금강은 다른 강도 마찬가지지만 상류로 갈수록 폭이 좁아져 강의 좌우 언덕에 매목하고 있다가 불화살로 공격하면 배는 金撓되고 만다. 배를 타고 사비도성까지 나아갈 수 없었던 것도 그 때문이다. 백제의 人臣들이 ‘조통속에 있는 님을 죽이고, 그물에 걸린 물고기를 잡는 것과 같다’⁶⁷⁾고 얘기한 것이 이것이나, 가령성에서 1차적으로 기별포쪽으로 군사를 보내 기별포로의 상류를 저지하고, 이것이 여의치 않거나 침입세력이 강을 거슬러 유타오게 되면 2차로 강경쪽으로 군사를 보내 예복하면 서 기다릴 수 있는 곳이 가령성이었다. 백제 가령성이 ‘수류의 妙處’⁶⁸⁾이라고 표현한 것도 그 때문이다.

長門國城이 關門海峡 부근 어딘가에 있었을 것으로 보는 이유가 여기에 있다. 그랬기 때문에 조선식 산성 중에서 가장 먼저 長門國城을 축조하였을 것이다. 다시 말해서 지금까지 알려진 9개의 ‘조선식 산성’ 중에서 가장 중요한 성을 하나만 꼽으라면 바로 이 長門國城이 될 것이다. 야마토정권의 입장에서나 백제 遺民의 입장에서나 나당연합군이 일본 열도를 공격해 온다면 방어할 수 있는 가장 유리한 곳을 이곳으로 판단한 셈이다. 그래서 이곳에 최초

의 산성을 축조하였다고 생각한다.

셋째, 長門國城이나 人野城, 旗跡城을 축조한 다음에는 667년에 高安城, 犀鶴城, 金州城을 축조하여 淸野작전을 구사할 수 있는 준비를 마쳤다는 사실이다.

앞에서도 설명하였듯이 야마토정권과 백제 遺民들의 1차적인 전략은 나당연합군이 九州를 점령하지 못하도록 하는 것이었다. 아무리 나당연합군이라 하더라도 九州를 장악하지 못한 채 곧바로 近畿地域을 공격할 수는 없기 때문이다. 그렇게 하다가 세토내해(瀬戸内海)에 뒤로라도 차단당하게 되면 나당연합군은 그야말로 ‘조통 속의 새나 그물에 걸린 물고기’와 같은 상황이 되기 때문이다.

나당연합군의 입장에서 본다면 먼저 九州를 장악하여 교도보를 확보한 다음, 이곳을 밟았으로 세토내해(瀬戸内海)로 나아가야만 近畿地域을 공격할 수 있다. 야마토정권과 백제 유민들의 입장에서 본다면 九州地域이 나당연합군의 수중에 들어가면 세토내해(瀬戸内海)나 近畿地域을 방어하는 것이 대단히 불리해지지만 九州地域을 지켜낸다면 그만큼 近畿地域을 지켜내는데 유리할 수밖에 없다. 결국 九州地域을 누가 장악하느냐에 승패가 달려 있었던 셈이다.

그럼 九州地域을 장악한다는 것은 무슨 뜻일까. 그것은 바로 人宰府 政廳을 누가 차지하느냐가 중요한 관건이다. 만약 나당연합군이 大宰府 政廳을 차지하게 되면 그것은 곧 九州를 장악하게 되었나는 뜻이 되고, 야마토정권과 백제 유민들이 人宰府 政廳을 지켜내게 되면 나당연합군의 공격을 물리치게 되는 셈이다.

이처럼 大宰府 政廳을 누가 차지하느냐가 九州地域을 누가 장악하느냐로 연결되고, 九州地域을 누가 장악하느냐에 따라 近畿地域 또한 누가 장악하느냐가 결정되기 때문에 결국 야마토정권이나 백제 유민들의 입장에서는 九州地域을 지켜내는 것이 중요한 승부처가 될 수밖에 없었다. 長門國城의 축조에 뛰어어 人宰府 政廳 주변에 人野城과 旗跡城을 축조한 것은 그 때문이었던 것으로 이해된다. 다시 말해서 水城만으로는 나당연합군의 공격을 방어하기에 벅차다고 생각하고, 추가로 大宰府 政廳 주변에 방어력을 추가한 것이 곧 665년에 있었던 人野

城과 基驛城의 축성이다. 大宰府 주변에 이러한 산 성은 배치함으로써 水城이 끌리게 되면 곧바로 이 두 산성으로 들어가 놓성함으로써 나당연합군이九州를 장악하지 못하게 하고자 한 것이 당시의 전략이었다고 생각된다.

이렇게九州와 關門海峡에 방어력을 집중하여 1차적으로는九州를 방어하고, 이것이 여의치 않게 되면 2차적으로 關門海峡을 방어함으로써 나당연합군이 세토내해(瀬戸内海)로 들어오지 못하도록 하는 것이 665년까지의 전략이었다.

667년에 들어서서 高安城, 五鷲城, 金田城 등이 추가로 축조된 것은 나당연합군을 방어하기 위한 전략이 또 한번 변하였음을 의미한다. 여기서 말하는 高安城은 <그림 3>에서 보듯이 오사카 남부지역에 자리하고 있고, 五鷲城은 시코쿠(四國)의 香川縣에 위치하고 있고, 金田城은 對馬島에 있다. 對馬島~세토내해(瀬戸内海)~近畿地域에 이르는 긴 간선도로의 요소요소에 산성을 축조한 셈이다. 다시 말해서 665년까지의 전략이 關門海峡이나九州地域에 한정되어 있었나면 이제는 對馬島에서 近畿地域에 이르는 긴 전선을 구축하였다.

나당연합군이 일본 열도를 공격한다면 통과할 수밖에 없는 공격로 주변에 산성을 배치한 것은 백제, 아니 삼국이 공히 구사하던 清野作戰을 시도하기 위함이었다고 생각한다. 백제가 청야작전을 시도하였던 것은 眞駢城을 통해서 알 수 있다.

D. 福信 등은 眞駢城이 강에 임하여 높고 험하고 요충지에 해당되므로 군사를 더하여 지키게 하였다. 仁軌가 밖에 신라 군사를 둑려하여 성가퀴에 육박하였는데, 날이 밝을 무렵에 성으로 들어가 800명을 목 베고 드디어 신라의 군량 수송로를 뚫었다.⁷⁰⁾

<사료 D>에서 보면 백제 부흥운동 당시 부흥군들이 眞駢城에 주둔해 있으면서 신라로부터 扶餘의 나당연합군에게 전해지는 보급품을 차단함에 따라 사비도성에 고립되어 있던 나당연합군이 진현성을 공격하여 함락시킴으로써 비로소 饋道가 개통되었음을 밝히고 있다. 여기서 말하는 眞駢城은 대전시 서구 흑석동에 자리하고 있는 흑석동산성인데,⁷¹⁾

<사료 D>에서 보듯이 국경에서 사비도성에 이르는 중간지점에 자리하면서 보급품을 차단함으로써 사비도성에 주둔하고 있던 나당연합군을 곤경에 빠뜨리고 있다. 이것이 바로 청야작전이다. 원래 '清野'라는 것은 들판이나 민가에 비축되어 있는 곡식을 전부 산성으로 옮겨 직으로 하여금 한류의 군량도 취할 수 없도록 하는 계책을 말한다.⁷²⁾ 산성방어는 이러한 창야가 병행되어야만 효과를 발휘할 수 있는데, 국경선에서 도읍지에 이르는 간선도로가 걸 수록 유리하다. 667년에 對馬島에서 오사카에 이르는 긴 노선에 산성을 축조한 것도 그 때문이라 생각한다.

요컨대 야마토정권과 백제 유민들은 나당연합군이 일본 열도를 공격해 올지도 모른다는 불안감 속에서 1차적으로는九州地域을 지켜내는 전략을 선택하였고, 그것이 여의치 않을 때에는 세토내해(瀬戸内海) 안으로 들어오지 못하도록 2차 방어망을 구축하였으며, 마지막에는 국경에서 도읍지에 이르는 침공로 주변에 산성을 배치함으로써 3차 방어망을 구축하였다. 이러한 방어망이야말로 그 자체 백제가 평소 구축하고 있던 관방체계와 아주 흡사한 것이었다.

IV. 맷음말

서일본에는 백제강전후 후 일본으로 건너간 백제 유민들의 지휘하에 축조된 산성이 자리하고 있다. 그것이 이문바 '조선식산성'이다. 백제 유민들의 지휘하에 축조된 산성이기 때문에 당연히 백제산성과 밀접한 관련이 있을 것으로 예상되지만, 그 구체적인 실상에 대해서는 아직까지 잘 밝혀지지 않고 있다. 그것은 양쪽의 산성을 서로 비교할 수 있을 만큼 발굴조사가 충분히 이루어지지 않았기 때문이다. 그래서 여기에서는 '조선식산성'의 축성과 관련된 문헌기록을 살펴봄으로써 백제산성과의 관련성을 찾아보았다.

야마토정권과 백제 유민들은 나당연합군이九州地域을 장악하지 못하도록 하는 것이 1차적인 전략이었던 듯하다. 大宰府 政廳 주변에 水城이나 大野城, 基驛城을 집중해서 축조한 것은 그 때문이라 생각된다.

그런데 이러한 1차 전략이 실패로 돌아갔을 때부터 대비해서 축조한 것이 665년에 있었던 長門國城의 축조다. 長門國城은 아직 그 실제가 확인되지 않아 정확한 위치를 알 수 없는 형편이지만, 그렇다 하더라도 長門國에 쌓았다는 기록을 참고해 볼 때 關門海峡 주변에 자리하고 있었을 가능성이 높다고 생각한다. 이곳에 산성을 축조한 이유는 關門海峡을 장악함으로써 나당연한 군이 세토내해(瀬戸内海)로 들어서지 못하도록 하고자 한 의도였다. 이것이 바로 2차 방어전략이었다고 할 수 있는데, 俊伐浦와 금강을 장악함으로써 금강을 통한 침입을 차단하던 백제의 방어체계와 대단히 유사한 방어 전략이었다.

이러한 2차 방어망을 구축하고도 안심이 안 되었던지 대마도에서 시코쿠(四國), 그리고 近畿地域에 이르는 곳에 金田城, 丹鷲城, 그리고 高安城을 축조하였다. 667년에 있었던 일이다. 이것은 국경에서 왕도에 이르는 간선도로 주변에 산성을 배치하여 유사시에 보급품을 차단함으로써 침입세력을 본 경에 빠뜨리던 백제의 전형적인 산성 전술, 즉 清野作戰을 그대로 재현한 것이라 할 수 있다.

이렇게 서일본의 '조선식산성'은 기록에 남아 있는 것처럼 백제의 유민들의 의해 축조된 만큼 백제 산성과 밀접한 관련이 있음을 알 수 있다. 산성이 자리한 위치로 미루어 볼 때 백제가 평소 구사하던 산성 전술을 그대로 계획한 것이라 해도 과언이 아니다. 앞으로는 양 지역의 산성에 대한 발굴조사가 이루어져 각 구성 요소별로 어떠한 공통점과 차이 점이 있는지가 하나 하나 밝혀지기를 기대한다.

【참고문헌】

1. 사료
『삼국사기』, 『日本書紀』, 『續日本紀』, 『翰苑』
2. 단행본 / 보고서
김영국 외, 2019, 「부여 청마산성」, 백제문화재연구원.
박순발·성정용, 2000, 「百濟泗沘羅城」, 충남대 백제연구소.
박순발 외, 2002, 「百濟泗沘羅城」 III, 충남대 백제연구소.
3. 논문
김종수, 2016, 「일제강점기 부여 고적의 재해석과 고적관왕의 성격」, 『文化財』 49-1, 국립문화재연구소.
서정석, 2000, 「百濟 5方城의 위치에 대한 試考」, 『河西考古學』 3, 호서고고학회.
_____, 2007, 「사비도성의 방비체계와 금강」, 『백제와 금강』, 서경.
_____, 2010, 「의자왕의 전략과 황산벌전투의 실상」, 『軍史』 76, 군사편찬연구소.
_____, 2012, 「일본 고대산성 연구의 현단

- 계」『백제와 주변세계』, 진인진.
- _____, 2013, 「百濟산성이 일본'朝鮮式山城'에 끼친 영향」『역사와 남문』67, 호서사학회.
- _____, 2018, 「관방유적」『일본속의 百濟－규슈지역』, 충남역사문화연구원.
- 성주탁, 1982, 「百濟泗沘都城研究」『百濟研究』13, 충남대 백제연구소.
- _____, 1989, 「韓國 古代山城의 日本傳播」『國史論叢』2, 국사편찬위원회.
- _____, 1990, 「百濟 炭峴 小考」『百濟論叢』2, 백제문화개발연구원.
- 심정보, 1983, 「百濟 復興軍의 主要 據點에 對하여」『百濟研究』14.
- _____, 2010, 「백제사상 환산별전투와 삼영설치에 대하여」『충청학파 충청문화』10.
- 연민수, 1996, 「西日本 지역의 朝鮮式山城과 그 性格」『韓國古代史論叢』8, 가락국사적개발연구원.
- 유원재, 1996, 「百濟 加林城研究」『百濟論叢』5, 백제문화개발연구원.
- 윤무병·성주탁, 1977, 「百濟山城의 新類型」『百濟研究』8.
- 이남식, 1999, 「禮山 鳳首山城(任存城)의 現況과 特徵」『百濟文化』28.
- 李章熙, 1995, 「壬亂中 山城修築과 堅壁濱野에 대하여」『阜村中延澈教授併年退任紀念史學論叢』, 田中俊明, 1990, 「千都로서의 泗沘城에 대한 瑞備의 고찰」『百濟研究』21, 충남대 백제연구소.
- 차용걸, 2005, 「백제지역의 고대산성」(백제문화개발연구원 역사문고 18), 주류성.
- _____, 2007, 「제 5 절 일본에 있는 백제계 산성들」『百濟의 建築과 土木』(백제문화사대계연구총서 15), 충남역사문화연구원.
- 최석영, 2003, 「일제 식민지 상황에서의 부여(扶餘) 고적에 대한 재해석과 '관광명소'화」『비교문화연구』9-1, 서울대학교 비교문화연구소.
- 홍사준, 1967, 「炭峴考」『역사학보』35-36.
- 홍재선, 1982, 「百濟 泗沘城研究」, 동국대학교대학원 석사학위논문.
- 鏡山猛 外, 1965, 「おつば山神籠石」, 佐賀縣 武雄市.
- 關野貞, 1913, 「所謂神籠石は山城址なり」『考古學雑誌』4 권 2 호.
- 박순구, 2000, 「百濟 泗沘城の構造」『古文化談叢』44.
- 西谷正, 1994, 「朝鮮式山城」『岩波講座 日本通史』(제 3 권) 古代 2.
- 成周鐸, 1980, 「大野城小放」『古文化論叢』, 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行會.
- 小野忠熙, 1983, 「石城山神籠石」『北九州瀬戸内の古代山城』, 名著出版.
- 小川富士雄, 2000, 「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』44.
- 李進熙, 1977, 「朝鮮と日本の山城」『城』(田正昭編), 社會思想社.
- 長沼賢海, 1932, 「水城の大極の調査」『史跡名勝天然記念物調査報告書 제 7 집』, 福岡縣.
- 赤司善彦, 2017, 「大宰府と古代山城の誕生」『徹底追究! 大宰府と古代山城の誕生』(発表資料集), 九州國立博物館·熊本縣教育委員會.
- 井上秀雄, 1987, 「東アジアのなかの古代朝鮮の城郭」『東アジアと日本』, 吉川弘文館.
- 豊元國, 1985, 「長門城の所在について」『北九州瀬戸内の古代山城』(小川富士雄編), 名著出版.

蓮華文を有する陶板について ～塚原遺跡群出土未報告資料の紹介～

上田 龍児

1. 経緯

令和元年12月12日、大野城市の文化財収蔵庫を整理中に1点の資料（以下、本資料）が日に止まった。一看して瓦に見えたが、手にとって観察してみると表面に蓮華文を表現していることが分かった。新しい時代の遺物である可能性も考えたが、全体的に古代の遺物の雰囲気であったため、持ち帰って図化し類例を検討することとした。

本稿は、塚原遺跡群出土未報告資料を紹介するものである。

2. 塚原遺跡群の概要と出土状況

(1) 遺跡の概要

塚原遺跡群は大野城市牛頭に所在する。牛頭川

左岸の河岸段丘上に位置し、牛頭窯跡群の中央部にあたる（図1）。

1991～1993年度にかけて発掘調査を実施し、1994年度に報告書を刊行した。調査では古墳時代の群集墳、古墳時代～古代の集落跡や縄文時代集落の一部を確認した（図2）。群集墳は調査区南側に位置し、5世紀後半に始まり6世紀前半頃まで新規造墓が認められる。6世紀後半～末になると群集墳の北側に集落が出現する。一部は古墳を破壊して堅穴住居がつくられており、この段階になると古墳への營みは停止していた可能性が高い。当該期は牛頭窯跡群で窯の基数が増加する生産の拡大期にあたり、周辺では多數の堅穴住居で構成する集落が複数出現することから、塚原遺跡の集落の出現もこの脈絡の中で理解できる。堅穴住居は30棟ほどあり、多くは6世紀末～7世紀前半頃のもので、7世紀中頃～8世紀後半まで継続する。堅穴住居群の東側・北側には掘立柱建物が複数あり、詳細な時期は不明であるが住居群と共に



図1 塚原遺跡群の位置

存する可能性が高い。このほか、住居に混在して多数の土坑があり、大半が8世紀の廃土坑である。なかでもSK12などは多量の須恵器が山上しており、山荷する須恵器の選別に関わる遺構である可能性も指摘される。牛頭窓跡群が終焉を迎える9世紀前半には集落が断絶することからも、須恵器生産に関わる集落と想定される。

(2) 出土状況

本資料が収納されていた袋には、「21号墳石室

アナ 911118」というラベルが付っていた。21号墳は群集墳の中では最も北側の集落域に近い場所に位置する。直径8mほどの円墳で、墳丘は完全に消滅しており、横穴式石室の基底石および敷石の一部が残存する。石室中央へ奥壁は、直径1.5～2.0mほどの円形土坑により破壊されている。ラベルに記された「アナ」というのは、この円形土坑（報告書では「攪乱」と表現）である可能性が高い。なお、同じ袋に収納されていた遺物は、古墳時代～奈良時代の須恵器が主体であり、本資



図2 塚原遺跡群遺構配置図

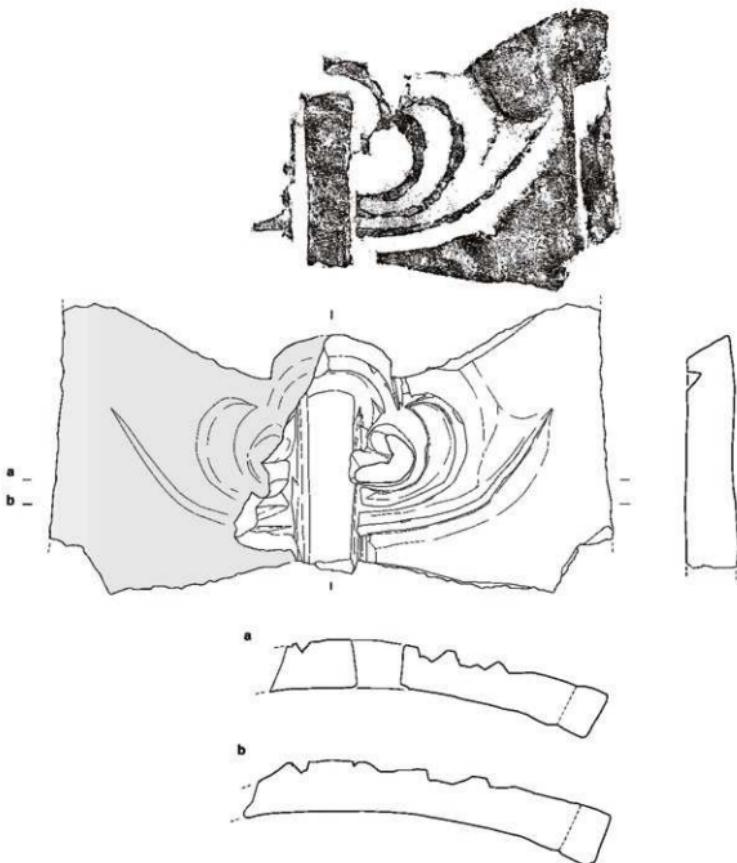


図3 塙原遺跡群出土の陶板



写真1 陶板（凸面）



写真2 陶板（凹面）

料はこれらと一緒に出土したものと考えられる。ただし、本来的に円形土坑に伴うかどうかは不明であり、明確な共伴遺物は不明といわざるを得ない。

3. 資料の紹介（図3、写真1・2）

図3に図示した。破片であるため全形は不明であるが、厚さ1.9～2.3cmの板状を呈し、現状の幅は15.7cm、推定復元で最大幅23.4cmである。短軸方向に若干湾曲しており、平瓦のような形態となる。片面（以下、凸面）に側面観の蓮華文を表現する。2本の直線的な線刻により中軸線を描いた後、頂部を削り出し、中心部の花弁を透かし彫りする。その後、中心側の花弁から外側の花弁へと描画していくことが、粘土の乾燥状態から復元できる。ヘラ状工具により施しておらず、ヘラケズリ状の痕跡が残る。鉄刀子のような工具が想定できよう。凸面は不定方向のナデ、裏面（以下、凹面）は横（短軸）方向のナデである。側縁部は幅1.5cmほどの粘土紐を維ぎ足しており、側縁部にケズリを施し、維ぎ足し部の裏面は縦方向のナデを施す。タタキの痕跡や布目痕・模骨痕は確認できず、端部に維ぎ足しがあることや凹面・凸面を丁寧にナデる点など、通常の平瓦の製作技法と

は異なる。

焼成は良好で瓦質というより須恵質である。凸面は褐灰色、凹面は灰色を呈する。胎土中に1～2mmの白色砂粒や黒色粒子を含む。器面には初期状の圧痕が複数有り、破断面でも確認できることから混和材の可能性がある。また、胎土中には繊維状の物質を含む。

4. 類例の検討

側面観の蓮華を表現した瓦や鶴尾もしくは瓦塔のような器物である可能性を想定して、類例を検討した。

側面観の蓮華を表現した資料 ①近江に分布する蓮華文方形軒瓦、②大阪・西琳寺跡や扶余王興寺の鶴尾などが挙げられる（図4）。

本資料はわずかに凸状を呈する面に施すことから、①の可能性は低い。また、推定幅25cmほどであり鶴尾にしては小さく、また横方向に湾曲していることや側縁部も表面と同程度の焼成具合であることから、②鶴尾の可能性も否定される。

このほか、近いモチーフを有する資料としてバルメット文を有する隅木蓋瓦もあるが、やはり湾曲することや側縁部の焼成具合から可能性は低い。

瓦塔 瓦塔で透かしを有する部位として、木煙が

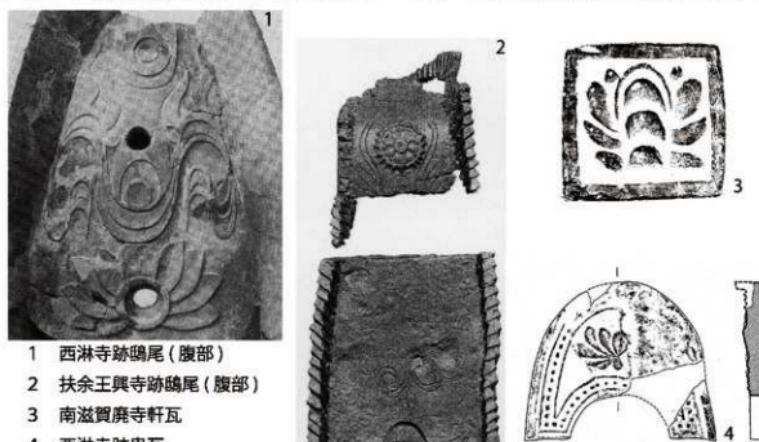


図4 側面観の蓮華を表現した資料

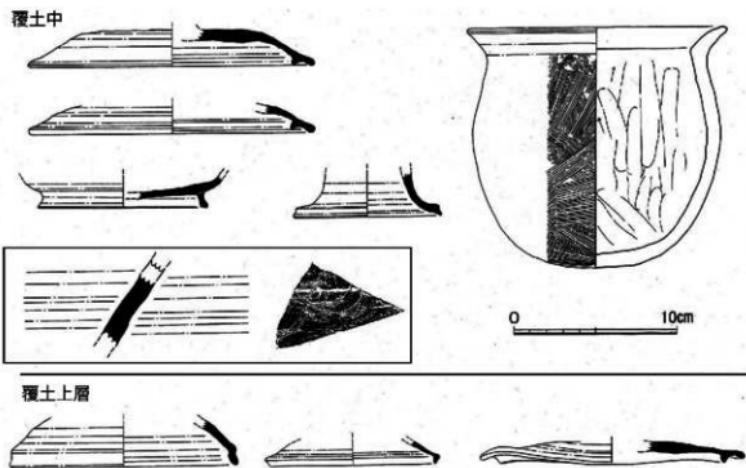


図5 上園遺跡14次SC12出土遺物

ある。本資料は凹面には文様がなく、片面のみを見せる意図がうかがえることから、水煙の可能性はない。また、瓦塔に伴う水煙と仮定した場合、非常に長大な瓦塔を想定する必要があり、この点からも否定される。

5. 結論

性格 凸面に蓮華文の側面觀を透かし彫り・線彫りで表現した陶板、という以外に用途・機能については全く不明であるが、蓮華文という性格上、仏教的な器物が想定される。実際、牛頭窯跡群では、瓦はもちろんのこと水瓶・托や瓦塔を生産し、本堂遺跡では8世紀後半を中心仏教的な性格が強い墨画土器や香か蓋・相輪形鉢蓋、「誠」・「山門」銘墨書土器などの仏教的遺物が出土している。また、本堂遺跡12・17次SB04のような村落内寺院と考えられる遺構や、御供田遺跡（九州大学筑紫地区遺跡群）でも古代の寺院跡が確認される。

以上より、本資料は仏教的な器物であり、道具瓦の一種である可能性を提示しておきたい。

製作時期 製作時期については不明である。上述したように、本資料を道具瓦と仮定した場合、塚原遺跡群では7世紀中頃以前のいわゆる初期瓦が

伴うものの奈良時代以降の瓦が出土していないこと、類例のない珍奇な1点ものであることから、牛頭窯跡群で初期瓦を生産する6世紀末～7世紀前半頃の所産である可能性を提示したい。

ところで、牛頭窯跡群開窯期以来の須恵器工人集落である上園遺跡では、7世紀後半の堅穴住居の中から側面觀の蓮華文をヘラ書きした須恵器片が出土している（図5）。上園遺跡では7世紀以降の資料がやや乏しく、特に7世紀後半段階における評価は今後更なる検討を要するが、周辺では依然として須恵器の窯が維続していることから、工人集落であった可能性は充分想定できる。したがって、牛頭窯跡群内には少なくとも7世紀後半には側面觀の蓮華文を表現しうる須恵器工人がいた可能性が高い。塚原・上園の両資料とも側面觀の蓮華文を表現する点で共通している点は非常に興味深い。

以上、本資料について7世紀前後に生産された道具瓦の一品と想定した。当該期の牛頭窯跡群では、渡来人が居住し窯業生産に関わっていたことが明らかになっている。塚原遺跡群で出土した蓮華文を施す陶板は、いち早く外来文化を摂取し、焼物として生産するという牛頭窯跡群の特徴の一

つを示す資料である可能性がある。

いずれにせよ、類例不明の器物であり、年代や性格については根拠が脆弱である。今後も継続して類例の探索を行うとともに、検討を進めていきたい。

図3は上田が実測、小嶋のり子が製図・採括した。写真1・2は上田が撮影した。その他の図は、各参考文献より引用（一部改変）した。

上田 龍児（うえだ りゅうじ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課係長

謝辞

本稿をなすにあたり、ふるさと文化財課職員より教示を得た。また、一般的な瓦との比較については元大野城心のふるさと館職員主税和賀子氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、1975,『櫻木原遺跡発掘調査報告－南滋賀庵寺瓦窯一』。

大野城市教育委員会、1995,『牛頭塚原遺跡群』、大野城市文化財調査報告書第44集。

羽曳野市教育委員会、1995,『古市遺跡群X VI』、羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第32集。

大脇潔、1999,『日本の美術 第392号 鶴尾』。

羽曳野市教育委員会、1999,『占市遺跡群XX』、羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第37集。

大野城市教育委員会、2008,『牛頭窯跡群－総括報告書－』、大野城市文化財調査報告書第77集。

九州大学総合博物館、2009,『奴国の南－九大筑紫地区の埋蔵文化財－』(九州大学総合博物館平成20年度公開展示・九州国立博物館トピック展示図録)。

大野城市教育委員会、2015,『上岡遺跡5－第14次調査－』大野城市文化財調査報告書第130集。

洪パルグム（翻訳：岩戸晶子）、2020,「9 韓国 の鶴尾」『鶴尾・鬼瓦の展開－鶴尾－（古代瓦研究会第20回シンポジウム発表要旨』、奈良文化財研究所。

西海道における軒丸瓦一本づくり

主税 和賀子

1.はじめに

本稿では、西海道における軒丸瓦一本づくりについて、現状を把握することを目的とする。日本列島では、6世紀後半の飛鳥寺造営以降、造寺技術が伝えられ、その際に瓦をつくる技術もたらされた『日本書紀』巻21 崇峻元年)。遺跡から出土する瓦の文様や作り方を観察することで、およそその年代や地域的特徴を把握することが可能である。特にこの40年ほどで、瓦の作り方、製作技法に着目した研究が増加してきた。各地で製作技法に関する事例が蓄積されてきたこともあり、全国を対象とした製作技法の総括的検討が研究会のテーマとして取り上げられるようになってきた(奈良文化財研究所 2018, 2019)。

本稿で扱う西海道についても、瓦の製作技法に関する検討が進められており、そのような中でも、軒平瓦や平瓦の製作技法については、国分寺造営に伴って一枚づくりを採用する地域が多いなど、一定の共通見解が得られてきたと考えられる(栗原 1990, 1999, 梶原 2000, 奈良文化財研究所 2019)。そこで本稿では、各地で発掘調査が増加し、從来個別に事例報告されている軒丸瓦の一本づくり技法に着目し、西海道における現状を整理したい。

2.これまでの研究状況と課題

軒丸瓦の一本づくりは、全国で確認されている。一本づくりについては先行研究で整理されており、A~D技法の4つに類型化されている(鈴木 1990)。A技法は筒形成形台成形、B技法は粘土糀巻きあげ成形で、後述する神ノ前窯跡や月ノ浦窯跡出土の例が挙げられている。C技法は瓦当面嵌め込み成形で、後述する興善寺廃寺出土例が挙げられている。Dは型造り成形で、いわゆる横置型一本作りと呼ばれている方法である。近年では、横置型一本作り技法と国分寺造営期の造瓦技術の展開の関連について言及されている(梶原

2008)。また一本づくり技法を研究会のテーマにして全国的傾向を把握する動きもあるが(奈良文化財研究所 2018, 2019)、地域によって一本づくり技法の内容や時期が異なるため、全国的な議論が難しい状況である。本稿で対象とする西海道は、一本づくり技法が他地域とは様相が異なることも指摘されている(山口 2011)。

西海道では、神ノ前窯跡出土の無文軒丸瓦(石松・高橋 1979)や、興善寺廃寺出土の鬼面文軒丸瓦・單弁八葉軒丸瓦(野田編 1980, 広瀬 1980)、月ノ浦1号窯跡出土の單弁軒丸瓦(石松・舟山 1983)で一本づくりの瓦が早くに報告されている。特に西海道では、後述するように、一本づくり技法が西海道内の造瓦技術の展開のあり方と関連するため、その現象を把握することは重要である。

西海道では、朝鮮半島や畿内でみられる直當文様や、觀世音寺・大宰府政府を中心とした大宰府史跡で主に使用された「大宰府系瓦」の瓦当文様の影響を受けた瓦が広くみられる。西海道の瓦研究で基礎となる小田富士雄の一連の研究では、大宰府系瓦の影響を受けた瓦が西海道各地の国分寺を中心とした遺跡で出土することから、国分寺造営時に大宰府から各國へ技術的援助があり、大宰府文化圏のようなものがこの時期に成立したと評価してきた(小田 1957a, 1957b, 1958a, 1958b)。そのため、大宰府系瓦がどのように成立したのか、その成立過程が一つの議論となっている。大宰府系瓦の成立については、一本づくり技法との関連を指摘した森郁夫の研究がある。森は、大宰府系瓦の一つである老司式軒丸瓦の特徴として、瓦当裏面下部周縁が堤状に高く作られることがあり、これは肥後地城で主にみられる、一本づくりから派生した「技法II」(野田編 1980)と関連があるとして、肥後のT人の関与を指摘した(森 1983)。しかし、老司式軒丸瓦と肥後の瓦の年代的矛盾によりこの説は否定されており、近年では筑前や豊前で出土している朝鮮半島系瓦と関連する可能性も指摘されている(高橋 2007, 杉原 2007)。大宰府系瓦の成立過程と一本づくり技法の展開の関連の有無を調べるには、まずは西海道における一本づくり軒丸瓦の現状を把

握する必要がある。

3. 西海道における一本づくり軒丸瓦（図1～3、表1）

西海道出土の古代瓦にみられる主な一本づくりは、瓦当と円筒状の丸瓦を各々製作し、両者を接合して不要部分を除去するという方法である。特徴としては、多くの資料で瓦当裏面の下端に凸帯が残る。また、瓦当裏面に一周するようなナデ調整がみられる場合や、円筒状丸瓦を半裁した際の工具痕（または糸切痕）が丸瓦側面延長上の瓦当側面に確認されることが多い。一本づくりの中でも細部で違いがあり、瓦当裏面に別作りした円筒状丸瓦を接合したり、瓦当裏面に円筒状の丸瓦を製作するもの（I-1）と、円筒状丸瓦を瓦當に嵌め込むもの（I-2）がみられる（図1）。I-1は丸瓦の先端が瓦当裏面にまでしか到達しない。鈴木のB技法に近い。それに対して、I-2は丸瓦の先端が瓦当の周縁部を形成する。（鈴木1990）のC技法、（野田編1980）の技法Iに相当する。他地域で確認される縱置き型一本づくり（鈴木のA技法）や横置き型一本づくり（鈴木のD技法）は、西海道では確認されていない。

一本づくりではない軒丸瓦は、瓦当と別作りして半裁した丸瓦を接合する接合式である（II）。西海道出土の軒丸瓦では、およそ3種の接合方法が確認される（図2）。1つめは半裁した丸瓦を瓦當に被せる方法（II-1）、2つめは半裁した丸瓦を瓦當裏面に接合する方法（II-2）、3つめは瓦筋に途中まで瓦当の粘土を詰めた後に半裁した丸瓦を接合し、残りの瓦当分の粘土を付加するのに合わせて丸瓦を固定する方法（II-3）である。

西海道出土の古代瓦のうち、現在管見で確認されている一本づくり軒丸瓦は表1、図2の通りである。主に、筑前、筑後、肥後地域で確認されている。どの地域も早い時期から寺院が造営された地域である。そのなかでも、筑前・筑後ではI-1が多く、肥後ではI-2のみが確認される。一方、同じく早くから多くの寺院が造営された豊前では、一本づくり軒丸瓦がほとんど確認されてい

ない。上坂廃寺跡出土の百濟系単介八葉軒丸瓦でのみ確認されているが、こちらの製作技法については一本づくりか否かについて賛否両論ある。当該資料を実際に観察した結果、瓦当裏面下端にケズリ面を伴う凸帯が残り、瓦当裏面には一周するナデ調整が確認され、丸瓦側面延長上の瓦当側面には円筒状丸瓦を半裁したときについたと考えられる工具痕が確認されることから、本稿では本資料を一本づくりとして位置づけたい。

筑前の塔原廃寺や日向の下北方塚原第2遺跡でも、瓦当裏面下端に凸帯をもつ軒丸瓦が出土している。但し、下北方塚原第2遺跡の報告書では接合式と報告されており（西嶋編2011）、塔原廃寺の報告書では特に製作技法については触れていない（宮小路1967）。実見していないので断定はできないが、老司式軒丸瓦や豊前の新羅系軒丸瓦にみられるような、接合式でありつつも瓦当裏面に凸帯をもつ事例の可能性が高い。一方、肥後の興善寺摩尼山の単介八葉蓮華文軒丸瓦は、先行研究において一本づくり（I-2、瓦當嵌め込み式法）とされているが（鶴嶋1991、金田1997）、実際に資料を観察した結果、瓦當裏面に半裁した丸瓦を接合した痕跡がみられ、また、瓦當周縁部は何度も粘土を付加することによって成形されている様子が観察された。よって、本資料は通常の接合式の可能性が残る。

4. 今後の課題

以上、報告が増加してきた一本づくり軒丸瓦について述べてきた。その結果、筑前、筑後、肥後地域で主に一本づくり軒丸瓦が確認され、その中でも筑前・筑後ではI-1、肥後ではI-2が主体を占めることがわかった。今後は、一本づくり軒丸瓦と接合式軒丸瓦との関連について検討を進めることが課題である。この検討を進めることで、西海道において広く影響を及ぼした大宰府系瓦の成立過程について、より検討を深めることが可能となる。

謝辞

資料の実見に際しては、諸機関並びに多くの

方々にお世話になりました。記して深く感謝申し上げます。

【参考文献】

- 石松好雄・高橋章, 1979, 「Ⅲ調査の内容 B遺物 2瓦類」『神ノ前窯跡』, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 36-38, 太宰府町教育委員会.
- 石松好雄・舟山良一, 1983, 「月ノ浦窯跡の小型瓦」『古代研究』25・26, 95-99.
- 江本直編, 1980, 『興善寺Ⅱ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会.
- 大塚紀宣・松尾奈緒子・藏富上寛編, 2013, 『那珂64』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1191集, 福岡市教育委員会.
- 小田富士雄, 1957a, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(一)」『九州考古学』(1), 8-9.
- 小田富士雄, 1957b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(二)」『九州考古学』(2), 8-10.
- 小田富士雄, 1958a, 「九州に於ける法隆寺系宇瓦の展開」『九州考古学』(3)(4), 7-11.
- 小田富士雄, 1958b, 「九州に於ける太宰府系古瓦の展開(三)」『九州考古学』(5)(6), 10-11.
- 柏原孝俊・山崎頼人編, 2014, 『上岩田遺跡V』, 小郡市文化財調査報告書第277集, 小郡市教育委員会.
- 梶原義実, 2000, 「国分寺造営期の瓦供給体制—西海道諸国の例から—」『考古学雑誌』86(1), 27-62.
- 梶原義実, 2008, 「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」『名古屋大学文学部研究論集(史学54)』, 59-81.
- 片岡宏二編, 1998, 『井上廬寺Ⅰ』, 小郡市文化財調査報告書第122集, 小郡市教育委員会.
- 片岡宏二, 2004, 「筑後における奈良時代以前の古瓦」『福岡大学考古学論集一小田富士雄先生退職記念』, 571-584, 小田富士雄先生退職記念事業会.
- 金田一精, 1997, 「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』10, 20-40.
- 栗原和彦, 1990, 「九州における平瓦・一枚作り」『九州歴史資料館研究論集』15.
- 栗原和彦, 1999, 「奈良時代 大宰府の瓦は繩目瓦であった—第98次南北溝SD2340調査から—」『九州歴史資料館研究論集』24.
- 久留米市教育委員会, 1985, 『東部地区区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第4集』, 久留米市文化財調査報告書第43集, 久留米市教育委員会.
- 酒井仁夫編, 1979, 「神ノ前窯跡」, 太宰府町文化財調査報告書第2集, 太宰府町教育委員会.
- 酒井仁夫・高橋章, 1984, 「豊前地方の8世紀代の軒瓦について—上坂廬寺跡出土瓦を中心に—」『九州考古学』59, 47-57.
- 坂田邦洋編, 1994, 「玉名郡衙」『玉名市歴史資料集成第12集—市制40周年記念—』, 玉名市・秘書企画課.
- 島津義昭, 1983, 「鞠智城についての一考察」『大宰府古文化論叢』上, 745-769, 吉川弘文館, 東京.
- 下村智・荒牧宏行編, 1992, 『那珂遺跡4』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集, 福岡市教育委員会.
- 脇波正人編, 1994, 『那珂10』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集, 福岡市教育委員会.
- 杉原敏之, 2007, 「老司I式軒先瓦」『觀世音寺考察編』, 93-100, 九州歴史資料館, 福岡.
- 鈴木久男, 1990, 「一本作り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』, 189-214, 京都国立博物館, 京都.
- 高橋章, 2007, 「筑紫觀世音寺軒先瓦の編年と課題」, 西日本古瓦研究会資料.
- 鶴嶋俊彦, 1991, 「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学 三島格会長古稀記念肥後考古』8, 105-133.
- 奈良文化財研究所, 2018, 「第18回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ—一本づくり・一枚づくりの展開Ⅰ—」発表要旨.
- 奈良文化財研究所, 2019, 「第19回 シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ—一本づくり・一枚づくりの展開Ⅱ—」発表要旨.
- 西嶋剛広編, 2011, 『下北方塚原第2遺跡』, 宮崎市文化財調査報告書第82集, 宮崎市教育委員会.
- 野田拓治編, 1980, 『興善寺Ⅰ』, 熊本県文化財調査報告第45集, 熊本県教育委員会.
- 広瀬正照, 1980, 「第III章調査 2. A地区的調

査 (1) 第1号遺構 ハ. 出土遺物 瓦『興善寺I』, 160-171, 熊本県教育委員会.

松本雅明, 1964, 「詫麻郡家址調査報告—熊本市大江町渡鹿△遺跡についてー」『熊本史学』27, 1-11.

松本雅明, 1965, 『陳内廬寺調査報告』, 城南町史編纂会.

宮小路賀宏, 1967, 「第6遺物 1古瓦」『塔原廬守』, 福岡県文化財調査報告書第35集, 福岡県教育委員会.

森郁夫, 1983, 「老司式軒瓦」『人宰府古文化論叢』下, 311-331, 吉川弘文館, 東京.

山口亨, 2011, 「九州でいう軒丸瓦「一本作り」技法について」『古文化談叢』65 (3), 151-153.

【挿図出典】

図1, 2, 表1 : 筆者作成。

図3 : 石松・舟山, 1983; 下村・荒牧編, 1992; 石松・高橋, 1979; 人塚・松尾・藏富士編, 2013; 背波編, 1994; 柏原・山崎編, 2014; 片岡編, 1998; 片岡, 2004; 久留米市教育委員会, 1985; 酒井・高橋, 1984; 坂田編, 1994; 松本, 1964; 松本, 1965; 島津, 1983; 江木編, 1980をもとに筆者作成。

主税 和賀子 (ちから わかこ)

元大野城市心のふるさと館運営課職員

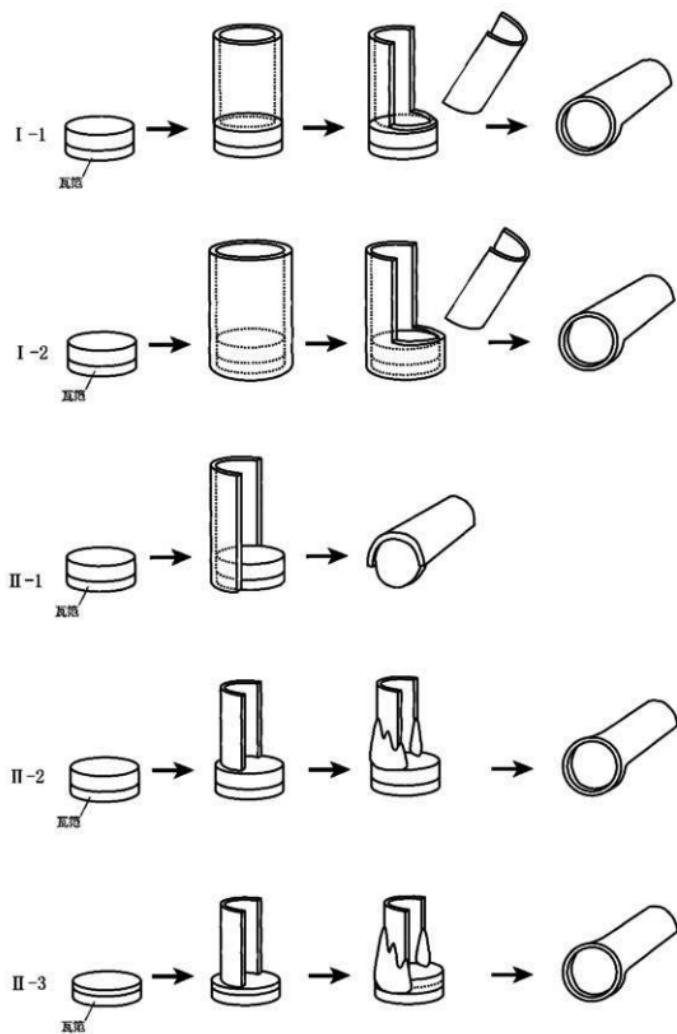


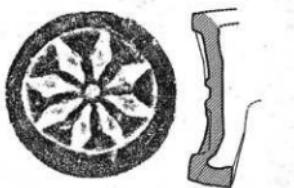
図1 軒丸瓦成形技法の分類

表1 西海道出土の一本づくり軒丸瓦

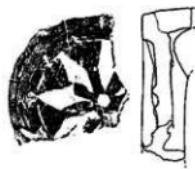
旧国名	遺跡名	文様・型式名	製作技法	備考	図2No.	図3No.
筑前	月ノ浦1号窯跡	単弁八葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土輪巻き上げの痕跡あり 丸瓦部は泥条盤葉技法	1	1-1
	那珂遺跡群				3	1-2
	月ノ浦2号窯跡	単弁九葉蓮華文	I-1	丸瓦部は粘土輪巻き上げの痕跡あり	1	2
	神ノ前2号窯跡	無文	I-1	丸瓦部は泥条盤葉技法	2	3
	那珂遺跡群	単弁七葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤葉技法	3	4
	那珂遺跡群	単弁六葉蓮華文	I-1	丸瓦部は泥条盤葉技法	3	5
筑後	上岩田遺跡	単弁六葉蓮華文、 井上廻寺跡	I-1	丸瓦部に竹状模骨痕あり	5	6-1
	井上廻寺跡	井上廻寺軒丸瓦1類			6	6-2
	ヘボノ木遺跡	ヘボノ木1式			7	6-3
	ヘボノ木遺跡	ヘボノ木1b式	I-1		7	7
	ヘボノ木遺跡	ヘボノ木1c式	I-1		7	8
	ヘボノ木遺跡	ヘボノ木4式	I-1		7	9
肥前	親興寺	親興寺1式	I-2		8	10
	親興寺	親興寺2式	I-2		8	11
	上坂廻寺跡	百濟系単八葉蓮華文	I-1		9	12
	立願寺廻寺跡	単弁八葉蓮華文・A型	I-2		10	13
	立願寺廻寺跡	複弁八葉蓮華文・B型	I-2		10	14
	立願寺廻寺跡	複弁八葉蓮華文・C型	I-2		10	15
肥後	渡鹿A遺跡	単弁八葉蓮華文	I-2		11	16
	陳内廻寺跡	単弁八葉蓮華文・I a式	I-2		12	17
	陳内廻寺跡	単弁八葉蓮華文・I b式	I-2		12	18
	興善寺廻寺跡	鬼面文・I a式	I-2		13	19
	塔原廻寺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?		4	
	興善寺廻寺跡	単弁八葉蓮華文・I b式	接合式?		13	
日向	下北方塚原第2遺跡	単弁八葉蓮華文	接合式?		14	



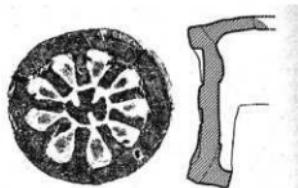
図2 西海道の一本づくり軒丸瓦出土遺跡



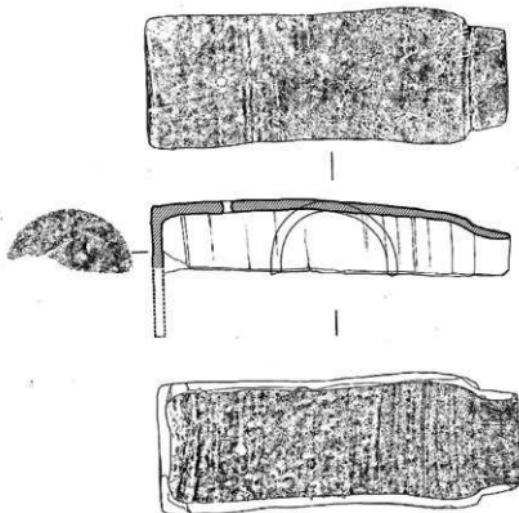
1-1 月ノ浦1号窯跡



1-2 那珂遺跡群



2 月ノ浦1号窯跡

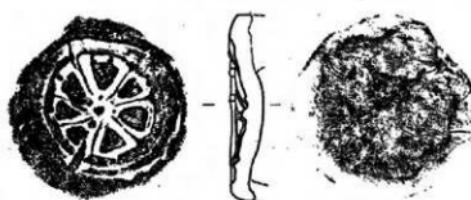


3 神ノ前2号窯跡

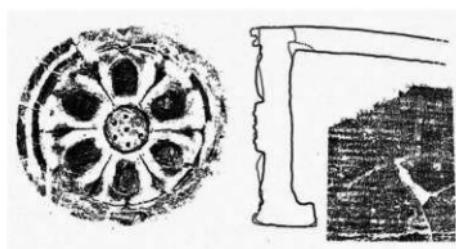
図3-1 一本づくり軒丸瓦 (1~2 : S = 1/4, 3 : S = 1/6)



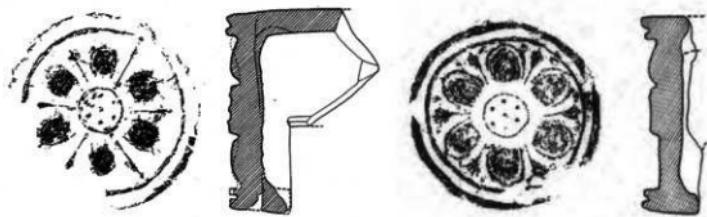
4 那珂遺跡群



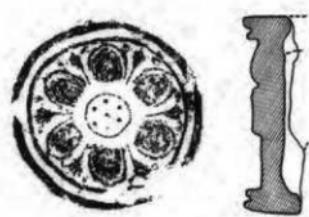
5 那珂遺跡群



6-1 上岩田遺跡



6-2 井上磨寺跡



6-3 ヘボノ木遺跡

図3-2 一本づくり軒丸瓦 ($S = 1/4$)



7 ヘボノ木遺跡



8 ヘボノ木遺跡



9 ヘボノ木遺跡



10 観興寺

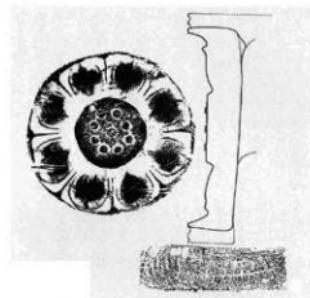


11 観興寺

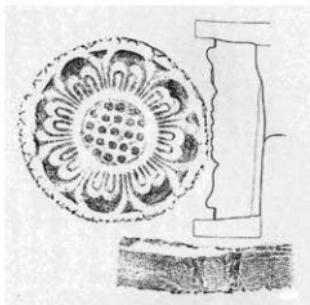


12 上坂廃寺跡

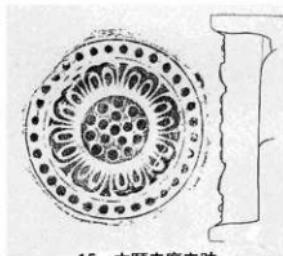
図3-3 一本づくり軒丸瓦 (S=1/4, 9は縮尺不同)



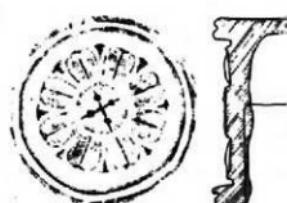
13 立願寺廃寺跡



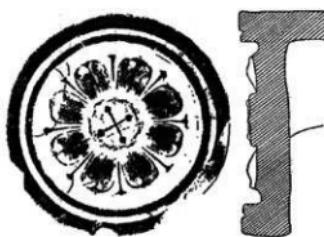
14 立願寺廃寺跡



15 立願寺廃寺跡



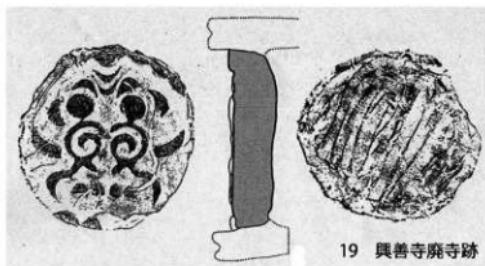
16 渡鹿 A 遺跡



17 陳内廃寺跡



18 陳内廃寺跡



19 興善寺廃寺跡

図3-4 一本づくり軒丸瓦 ($S=1/4$)

下大利の御大師様

山村 智子

1. 御大師様

御大師様は真言宗の開祖・空海を「オダイシサマ」、「オタイシサマ」と尊称し、信仰する信者で行う宗教行事のことである（以後、行事のことを御大師様と記す）。この行事は、空海が入定したとされる3月21日の前日の20日を御通夜（オツーヤ）、あるいは恩日（オンビ）、遠忌（オンキ）として、毎月20日の夜に行われる。宿（ヤド）と呼ばれる当番の家に集まり、真言や経を唱えながら人数珠を繰り回す数珠縁りを行う。数珠縁りの後、宿が準備する茶や菓子で歓談するまでが行事の流

れである。また毎月20日の行事ごとに一定金額を積み立て、運営や懇親、時には相互互助として使用されることもあった。

このように特定の信者だけで共同利益（家内安全、健康長寿など）を祈願する集まりのことを講といい、対象とする信仰により男女に分かれて講を持つことがある。戸主（主に男性）だけで行う庚申講があり、本稿で紹介する御大師様は主に女性だけで行われたいわゆる大師講のことである。

御大師様は明治期以降、大野村を含む御笠郡内の農村地域に広がり、多くの集落で毎月20日夜8時に女性たちが宿に参集し、数珠繰りを行っていた（表1）。しかし、昭和40（1965）年代以降、農村部は急速な都市化、あるいは過疎化が進み、職業の多様化や住宅環境の変化、同居世帯の減少等から御大師様を取りやめるところが増えていった。



図1 御笠郡の村配置図

() は表 1 にある地名

表1 数珠繰り行事一覧表

た。そんな中、大野城市教育委員会ふるさと文化財課では下大利の御大師様の記録調査を平成8・15・29（1996・2003・2017）年と継続して実施していた。下大利の御大師様は箱の銘などから少なくとも明治19年6月には行なわれていたが、行事を行なう戸数が減少したことによい、平成30（2018）年4月20日に最後の御大師様を行い、132年の歴史に幕を下した。同年7月、下大利の御大師様を行なっていた方々から本市教育委員会ふるさと文化財課に数珠縫り道具一式が寄贈され、令和元（2019）年6月1日～8月30日に大野城心のふるさと館2階ミニテーマ展にて「大野城市最後の数珠縫り行事～下大利のお大師さま～」展を開催した。

本稿では下大利で行なわれていた御大師様についてその内容を紹介し、他地域で行なわれている行事

と比較することで集落の女性たちを中心に営まれてきた行事の役割について考察する。

2. 下大利の御大師様

（1）行事の始まり

下大利の御大師様の行事は明治19年に当時の下大利村の代表が四国八十八ヶ所巡りをしたことに

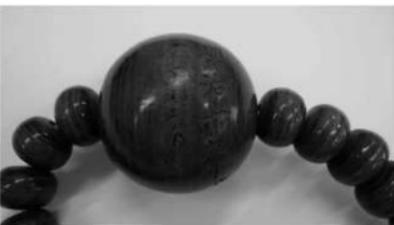


写真1 中玉の刻書



写真2 御大師様で使用する数珠縫り道具一式が収納されている百萬御珠数箱

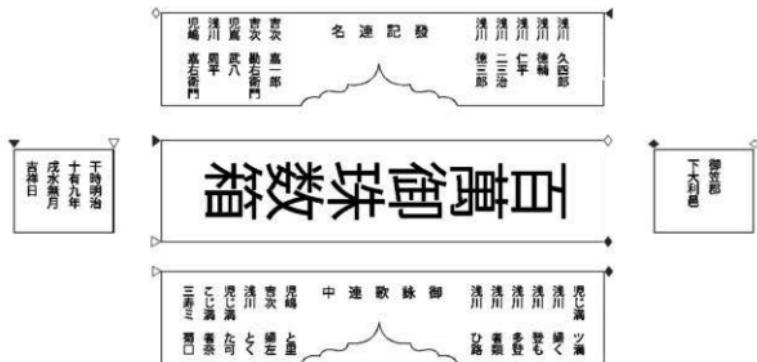


図2 百萬御珠数箱に墨書きされた文字

村民があやからうと始めたと伝えられている。数珠繰りで使用する大数珠の中玉に「明治十九年六月吉日 下大利村」と朱入りの文字が刻まれている。大数珠など道具一式を収納する百萬御珠数箱の蓋外側5面に「百萬御珠数箱」、「干時明治十九年戊戌無月吉祥日」、「御笠郡下大利亀」、「發記連名浅川久四郎 浅川徳輔 浅川仁平 浅川二三治 浅川徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児島武八 浅川周平 児島嘉右衛門」「御詠歌連中児じ満つ満 浅川婦く 浅川登も 浅川多登 浅川者類 浅川ひ路 児島と里 吉次婦左 浅川とく 児じ満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊口」が墨書きされている。

のことから、明治19年に数珠繰り道具一式が整えられ、行事が始まったことを示している。また22名の内、「三寿ミ菊口」は下大利出身者ではなく、御詠歌連中の女性たちの最後に名を連ねていることから、数珠繰り道具一式を眺えた時に御詠歌を教えていた女性ではないかと考えられる。

(2) 下大利の御大師様の民俗調査記録

ここでは平成8・15・29年と大野城市教育委員

会ふるさと文化財課が実施した「下大利の御大師様」の民俗調査記録を掲載している。平成8年は早瀬ひろ子が、平成15年は丸尾博恵が、平成29年の民俗調査は石木秀啓、林潤也、白濱聖子、山村智子が行い、山村が書き起こしを行った。

【平成8年1月20日】

行事を始めた明治19(1886)年当時は、50軒(下大利村のほぼ全戸)であった構成員も、戦前には15軒になり、現在は9軒になった。昔は男性のおまつりだったが、近年は女性のみで行われている。下大利では2ヶ所で「お大師さま」の集まりがあつていたが、今も残っているのは、老松神社傍の地区(小字上城戸、下城戸、川路)だけになった。

下大利のまつりでは毎月20日夜8時に当番の家に来るとすぐにお大師さまの掛け軸の前に行き、「南無大師遍照金剛」と3回唱えてお参りをし、皆が揃うの待つ。全員が揃うと、大箱から数珠を取り出し、八量の間に広げて、鉢を叩く人と念佛の先導者を起点に円陣を組み、念佛を唱えながら30分ほど大数珠をくり回す。大数珠の房付きの大玉と作成年月日(明治十九年六月吉日 下大利村)入りの中玉が自分の前に来たら、押しいただいて

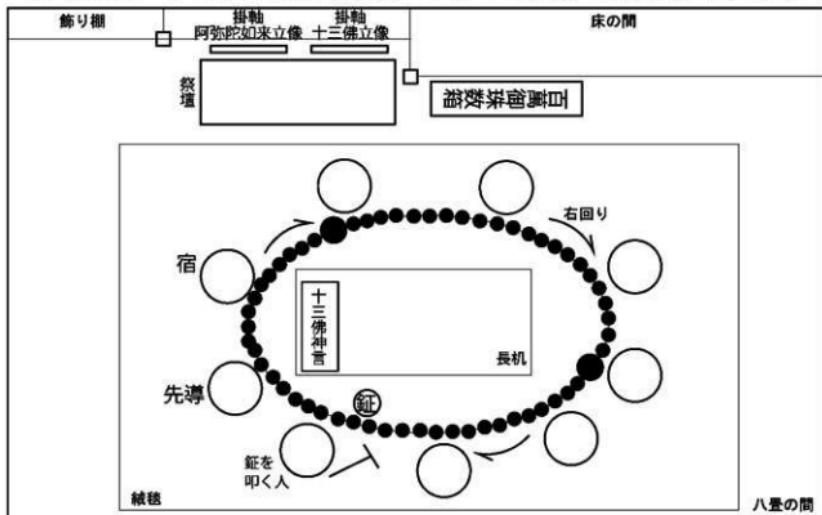


図3 下大利の御大師様の流れ全般図(平成29年12月20日)

祈りを捧げる。全員が同じ調子で数珠を送るので、どこかで弛むことも張りつめることもなく、念佛と数珠を繰る音が同じリズムで流れます。

30年前までは赤飯付の精進料理を食べていたそうですが、今ではお大師さまに赤飯をお供えするものの、簡素化されて茶と菓子のみになった。

【平成15年12月18～20日】

昔は男性も来ていた。数珠繰りの輪の中に入つて唱えていた。子供も来ていた。子供はダメということで大人ばかりになった。

御大師様の御通夜だから、女性ばかりが参加する。病気などの時に御大師様に頼ってしまう。お大師さまを続けるのは意志を引き継ぎたいと思う自分の気持ちである。しかし、子供たちが別所帯になっているので、続けていくのは無理だろう。

数珠繰りではないが、昔は春と秋のお彼岸に御笠八十八ヶ所靈場めぐりに近郊から人がお参りにこられていた。その時はお茶を沸かしてお接待をしていた。下大利には57～65番の靈場がある。

【平成29年12月20日】

(当日の準備)

1. 宿から宿へ申し送り

7戸で構成され、11月20日に当番だった宿が、12月20日の当番の宿に数珠道具一式が入った百萬御珠数箱を持っていき、申し送りをする。

2. 宿の準備

宿では床の間に阿弥陀仏立像と十三佛の掛軸を掛ける。十三佛の掛軸は大珠数箱に納められており、必ず掛けておかなくてはいけない。それ以外の掛軸は宿となる家で持っている掛軸（弘法大師御影像や弘法大師修行像、阿弥陀仏立像等）を掛けるため、宿ごとに掛軸が異なる。

宿によっては床の間ではなく、从壇の横に掛軸を掛け、祭壇を準備する。掛軸の前に白い布をかけた台を準備し、花、菓子、果物、豆御飯を供える。果物や菓子の種類は宿ごとに異なり、ケーキや饅頭がお供えされるときもある。必ず豆御飯を炊き、皿に盛り、供える。豆御飯は季節によって、豆の種類が異なり、初夏の頃はピース豆御飯、秋

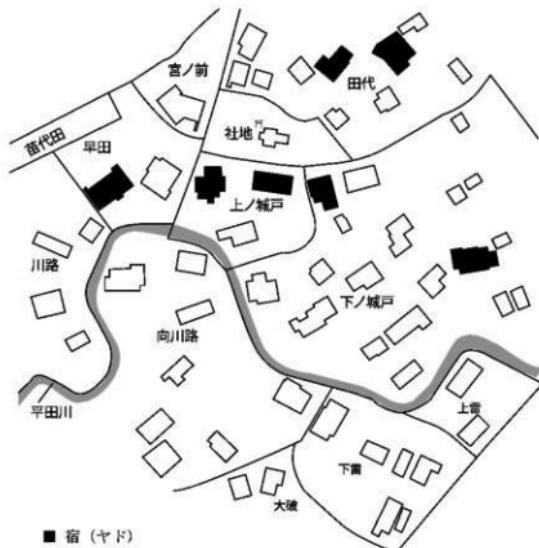


図4 下大利の御大師様の実施地域図（平成29年）



写真3 床の間に掛けられた阿弥陀仏立像掛軸（左）と
十三佛掛軸（右）



写真7 箱から経文と鉢、鉢叩き、大数珠を取り出す



写真4 掛軸の下に祭壇を設える



写真8 鉢の合図で数珠縁りを開始



写真5 豆御飯は必ず供える



写真9 数珠縁りの様子



写真6 茶と菓子を準備



写真10 数珠縁りの様子

から冬なら栗入り赤飯を供えする。鉢、線香立て、線香、蠟燭立て、数珠、数珠掛けを用意する。数珠縫りをする際に大数珠が擦れないように絨毯を敷き、部屋の中心に長机を置く。

3. 茶と菓子の準備

湯を沸かし、茶の準備を行う。菓子や果物を人數分、用意しておく。昔は宿が精進料理を用意していたが、準備が大変なため、茶と菓子だけになってしまった。

(宿の行事)

宿に地区の女性たちが集まり始める。宿の行事が開始される。

1. 祭壇に礼拝

宿に到着したら、まずは祭壇に座り、線香を上げ、鉢を叩き、礼拝した後、講の積立金（2,000円）を供える。

2. 数珠縫り

午後8時、7戸8名の参加者全員で、床の間に置かれた百萬御珠数箱から大数珠、鉢、鉢叩き、十三佛神言が書かれた経文を取り出す。全員で大数珠を持ち、長机を中心にして、円座に座る。大



写真11 大数珠など数珠縫り道具一式を箱に収納する



写真12 数珠縫り後、切れた紐

名称	時代	品質・形状	法量(cm)※縫跡く	員数	備考
百萬御珠数箱	明治19年6月	木製 箱型 墨書き	95.0×25.0 高さ 23.0	1点	蓋に「百萬御珠数箱」、側面に「于時明治十有九年成水無月吉祥日」、「御立郡下大利邑」、「浅川久四郎 浅川德輔 浅川仁右 浅川二三治 児嶋徳三郎 吉次嘉一郎 吉次勘右衛門 児嶋武八 浅川周平 児嶋喜右衛門」「御詠歌一岡 児じ森ツ浅川勝く 浅川豊も 浅川多登 浅川者輝 浅川ひ路 児嶋と里 吉次婦左 浅川と児じ満た可 こじ満者奈 三寿ミ菊口」墨書きあり
大数珠	明治19年6月	木製 納絃 刻書	全長9.52m、珠数 434個（大玉1、 中玉1、横玉4、 丸玉429）	1点	中玉に「明治十九年戊午六月吉日 下大利村」刻書あり
経文		絹紙	72.4×24.5	1紙	墨書き「カイキヨウガ...」
経文	昭和37年12月20日	紙製	86.0×24.5	1紙	墨書き「十三佛神言...」
十三佛立像	(明治時代)	紙製 掛幅装(紙)	66.6×24.3	1幅	修復時裏紙「家紋（三葉に桔梗）」「福岡市春吉 花月堂善永 電(00278)」印字あり 昭和24年以降に修理あり
弘法大師御修行像		紙製 横幅装(紙)	70.5×26.5	1幅	「弘法大師御修行口御影」
弘法大師御影像		掛幅装	71.0×27.3	1幅	
阿弥陀如来立像	(昭和36年)	掛幅装	28.0×11.5	1幅	裏面に落款「本願寺居落釋光尊」、「方便法身尊彰」、「願主釋」印字あり、包紙「般若聖人七百回大造忌記念 西本願寺」印字あり
叩き棒		木製 釘留め	叩き部12.3 高さ 34.6	1点	打部と持ち手部分は丸釘で接合
鉢		金属製	叩き部径8.2 底部 径11.1 高さ3.7	1点	裏面に判読不明墨書きあり
鉢		金属製	叩き部径7.7 底 部径9.7 高さ3.7	1点	裏面に「浅川德輔 児嶋徳三郎」墨書きあり
印鑑袋		紙製 袋	5.0×11.5	1点	朱印「大師」あり
数珠の紐	平成4年～平成29年	綿織り紐	太4.75mm×2 紐 2.48m	3点	

表2 下大利の御大師講数珠縫り道具一式寄贈品目録（平成30年）

数珠をまたぐことは禁忌とされている。経を詠む人の前に十三佛神言と書かれた紙を置き、鉢を叩く人が横に座る。それ以外に着座のきまりはない。昔は長机を片付けて数珠繰りをしていたが、長机を持ち上げることが体力的に難しくなり、長机を置いたまま数珠繰りを行う。2回叩かれた鉢の音を合図に、十三佛真言が唱えられ、大数珠を時計回り（右回り）に繰る。十三佛真言（各真言×7回）、光明真言（21回）、南無大師遍照金剛（7回）、南無阿弥陀仏（7回）、十句觀音経（2回）の順に唱える。真言などを1回唱えると鉢を叩く人が1回鉢を叩き、唱えるべき回数に達すると2回鉢を叩いて、次の真言や経へ誘導する。数珠繰り中に梵天がついた大玉と中玉が回ってきた時は、大数珠を額近くに持ち上げ、両手で頂いて礼拝する。十句觀音経を唱え終わると、数珠繰りは終了と

なる。全員で最後に大数珠を持って、礼拝し、大数珠と鉢、十三佛神言が書かれた紙を箱に戻す。

3.お接待

数珠繰りの後、午後11時頃まで宿が用意したお茶とお菓子で歓談する。昔は御通夜（オツーヤ）だから、精進料理（豆御飯付き）を作って食べていた。

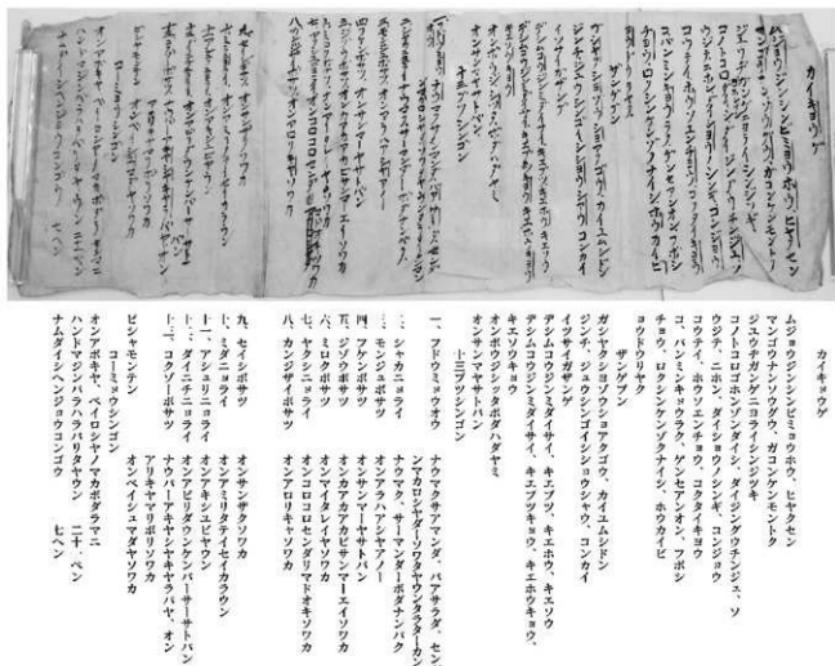
（講の積立金）

1. 親睦

宿の祭壇に供えられた積立金は掛け金を積み立てて、昔は籠栗への参拝に行くバス旅行などを行い、親睦を深めていた。

2. 大数珠の修復

平成4年12月に大数珠の糸が切れたため、積立金で修理に出し、平成5年1月に大数珠が修復されて戻ってきたことがあった。



上：写真13 経文1「カイキョウゲ・・・」 下：経文1「カイキョウゲ・・・」書き起こし文



写真14 掛軸「阿弥陀仏立像」



写真15 掛軸「弘法大師御影」



写真16 掛軸「十三佛立像」

上：写真17 経文2「十三佛神言」 下：経文2「十三佛神言」書き起こし文

平成29年12月20日、数珠繰りが終了した直後に、音を立てて大数珠の紐が切れた。つい先ほどまで数珠繰りをしていた時は、大数珠の紐が切れる兆候などまるでなく、下大利の御大師様での数珠繰りは今日が最後としていた日に大数珠が切れ、下大利の女性たちも調査を行っていた文化財課職員も一同嘆然といった雰囲気になった。

切れた大数珠は講の積立金で仏壇屋に修理を頼み、京都で修理された。修理を終え、下大利に戻ってきた大数珠を使い、平成30年4月20日に同じ宿で数珠繰りを行った。明治19年6月に始まった下大利の御大師様は、平成30年4月20日が本当に最後の行事となった。

その後、平成30年7月、行事を続けられていた下大利の女性たちを代表して浅川澄代氏から下大利の御大師様で使用されてきた数珠繰り道具一式15点が、大野城市教育委員会ふるさと文化財課に寄贈された。

(3) 寄贈資料から見た行事の変遷

寄贈資料の中で注目されるのが、2種類の経文である。これらの経文は大数珠を繰り回す数珠繰りの間、唱える真言や経を書き記したものである。

経文1はすべてカタカナ表記で書かれており、真言宗の檀家勤行集にほぼ添った内容が記されているが、カイキヨウゲ（開経偈）とザンゲブン（懺悔文）の間に、願文が挿入されている。願文には「此所御本尊大師、大神宮鎮守、縂じて、日本、大小の神祇、今上皇帝、法僧緑籠、国体強固、万民享樂、現世安穏、父母子離、六親眷属、乃至法界平等利益」と記され、下大利の御大師様の行事が弘



写真18 柚須原の観音誦（筑紫野市）

法大師を御本尊として、すべての人々の現世利益を願う内容となっている。願文の作成には真言宗の僧や門徒との関わりが推定される。

経文2は「昭和三十七年十二月二十日書之」と記載され、平仮名表記で十三佛真言と光明真言が記載されている。この経文は児嶋しづのさんが記したと伝えられており、真言の文字が神言と記されており、真言に欠落があったりと口伝の内容を書き起こしていると考えられる。

のことから、下大利の御大師様が開始された明治19年頃には、行事の開始や勤行の場に真言宗の僧や門徒との関わりがあり、真言宗の檀家勤行が戸主を中心に営まれていたが、徐々に女性中心の行事へと変わっていく中で開経偈や願文、懺悔文が欠落したと考えられる。その後、昭和37年に経文2が記された時には、十三佛真言と光明真言のみになっていた。さらに、平成15年の民俗調査記録によると、十三佛真言と光明真言の後に、南無阿弥陀仏と十句觀音経が加わった形で平成30年4月20日まで数珠繰りを行っていたことが分かった。

3. 数珠繰り行事の役割

下大利の御大師様は祭壇に掛けられる十三佛立像の掛軸以外は宿となっている家の宗派に任せられていたり、真言宗の檀家勤行集にはない「南無阿弥陀仏」や「十句觀音経」が加わったりと、緩やかで大らかな信仰の一面が見られる。このような行事の変化は同じ集落の中で生活をする女性たちによってもたらされたものである。



写真19 大石の大師誦（筑紫野市）

そしてこの行事の担い手の大半が他地域から嫁いできた女性たちである。春と秋の彼岸詣りの御接待、神社の祭りの準備、冠婚葬祭のお手伝い等、共同で行う行事は少なくはない。下大利村の通婚圏を知る上で重要な行事に「娘札打ち」がある。この行事は娘が14～21歳くらいまでの間に、御笠郡三十二ヶ所観音靈場を下大利から吉松・大佐野・二日市・立明寺・山口・平等寺・大興善寺・原田・天山・吉木・大石・袖須原・香園・本道寺・太宰府・觀世・中村・御陵などを先導者や村役とともに御詠歌を唱えながら巡礼を行う。これは単に信仰のためだけでなく、巡礼する土地の人々に妊娠のきた村の娘をそれとなく知らせるのが重要な目的の一つであった。巡礼した土地はそのまま通婚圏となり、昭和10年頃の戦前まで「娘札打ち」が続けられた。巡礼地では下大利と同じく数珠縁りを行う御大師様のいわゆる大師講の他に、観音講を行う地域もあった。観音講は毎月17日の夜に当番の家に集まり、「十句観音経」や「光明真言」等を唱えながら、数珠縁りを行う行事で、現在は筑紫野市袖須原で行われている。このような地域との通婚は從来の講の作法に影響を与え、また各家々の宗派の違いも加わり、十三佛真言・光明真言・南無阿弥陀仏・十句観音経を唱える「下大利の御大師様」の行事が形成されていったと考えられる。下大利で毎月20日の夜8時から御大師様が行われ、女性たちが円座になり数珠を繰ることで発生する鉢と数珠を繰る音、先導者に従って唱える真言だけが響き、大数珠は滞ることなく廻り続ける。数珠を繰るという行為は女性たちが経文1の「願文」にある「乃至法界平等利益（みんなが幸せになりますように）」を願うことであった。数珠縁りの後、茶と菓子で「おしゃべりをすること」がこの行事が長く続いてきた大事な要素だったと考えられる。片に一度、同じ集落の女性たちだけで夜遅くまで縁り広げられたおしゃべりの内容まで聞き取ることはできなかったが、他地域から嫁いできた女性たちにとって、家ごとの先祖祭祀を越えた信仰にふれる場であり、集落の情報を知る場でもあり、なにより同じ集落で暮らす女性たちの大変な息抜きの場であったのではないだろ

うか。

また、令和元年に大野城心のふるさと館で「大野城最後の数珠縁り行事～下大利のお大師さま～」展を開催した際に、市民の方から「畠説ではまだ毎月18日に数珠縁りを行っている。」「上大利では数珠縁りをしていないけど、今でもお茶会は続いている。」等の情報が寄せられた。

これらの情報を探して今後も継続した民俗文化財の調査を進め、「大野城最後じゃなかった数珠縁り行事」展（仮）の開催を目指しつつ、きめ細やかな地域の文化財情報の発信に努めていきたいと考えている。

謝辞

最後に本稿をまとめるにあたって、ご協力いただいた個人や団体の方々に記して感謝申し上げます（敬称略、五十音順）。浅川和代、浅川澄代、浅川ヒデ子、浅川正代、市川千香枝、市川敏光、市川正博、児嶋恵美子、児嶋絹子、児嶋邦次、小嶋恵子、渋田恵子、長谷繁光、長谷みゆき、長谷ゆき子、袖須原婦人会

【参考文献】

- 春日市, 1994, 『春日市史』下巻.
- 大野城市, 1995, 『大野城市史』民俗編.
- 筑紫野市, 1999, 『筑紫野市史』民俗編.

山村 智子（やまむら ともこ）

大野城市教育委員会ふるさと文化財課職員

**市民ミュージアム 大野城心のふるさと館紀要
第1号**

発行日 令和3年10月25日
編集発行 市民ミュージアム 大野城心のふるさと館
〒816-0934
福岡県大野城市曙町3丁目8-3
TEL 092-558-5000
印 刷 山口印刷株式会社 福岡営業所
〒819-0013
福岡県福岡市西区愛宕浜2丁目2-1-705号
TEL 092-881-3502